
一つの異世界

南津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一つの異世界

【Nコード】

N0626Z

【作者名】

南津

【あらすじ】

四季一しきいちは大学に通う21歳の青年。中性的な整った顔立ちで、日本人らしい黒髪黒目。両親を幼い頃に亡くし祖父の家で暮らしていたが3年前にその祖父も亡くなった。両親と祖父の残してくれた遺産で大学近くの賃貸マンションを借り、階下にある洋服店でアルバイトをしながら一人暮らし。海外への短期留学の際に事件に巻き込まれて死亡、異世界に。膨大な魔力と特異な能力をもち、一人で異世界に放りだされたハジメの物語。

第0話<プロローグ>（前書き）

初めて書く物語ですので、文章が拙いものになっていたり。主人公最強物になりますが、戦闘が多いわけではない、と思います。バツサバツサ敵を斬ったり殲滅したりにはならないはず。ゆっくりとした更新になると思いますが出来るだけ長く連載をしていきたいと思っています。

第0話<プロローグ>

「……」

僕の人生が終わった。

21年。今日までの人生を振り返って長いのか短いのか。

天寿を全うする者からすると短いだろう。母親から生まれて学校に通い、就職して退職。子供を育て両親を看取る。残りの人生をゆつくりと過ごすのが人生の目標だと言う人もいるだろう。

80年。だいたいその80年の間に人は様々な事を経験する。

僕の21年はどうだっただろう。

幼い頃に両親を亡くし、祖父に引き取られて中学・高校に進学。祖父を亡くして大学に進学。借りているマンションの一階にある被服店でアルバイトをしながら生活費を稼ぎ、親の残してくれた遺産で大学に通う。

在学中に海外へ短期留学し、その海外でテロに巻き込まれて死亡。

そう、銃撃を受けて死んだはず。

「……ということはどうゆうこと？」

目の前に広がっている風景はテロ巻き込まれた場所じゃないことは確か。

人が溢れていた街中の景色はなく木漏れ日が溢れる森があった。辺りには木や草のほかは何も無い。銃で撃たれたはずの胸や腹部には風穴があいて……いない。

「撃たれてない？ いや、確かに撃たれた……はず」

マシンガンみたいなので撃たれて死んだ……いや、死んでないけど。とにかく此処が何処だか分からないからな。とりあえず森から出るべきなのかな？

「まあいいか」

とりあえず森から出て人を探すことにしよう。此処が何処だか分からないんじゃないし。日本に帰れないし。

今日は留学先から日本に帰る日だった。チケットも買ったし……

「……って、あれ！？ カバンがない！？」

今気づいたが持ち物が何も無い。チケットも財布も他の物もカバンに入れていた。大体のものは自宅に送ったが……

「はあ、パスポートもない……」

ポケットを探ったが中には何も無いみたいだ。

「どうやって家に帰れというのだ」

お金もないし、こういうときは何処に行けばいいんだ？ 空港？
大使館に行けばいいんだっけ？

「とりあえず森を出ようか」

どちらに行けばいいのか分からないので少しでも明るい方に行くか。

「……」

しばらく歩いて行くと何やら物音が聞こえてきた。人かな？
森といたら熊とかだけどそうそうエンカウトするようなもので
もないだろう。……海外なら狼とかいるのか。

「怖っ」

少々寒気がしたが大丈夫……だろう。

……念のため石と木の棒を拾っておこう。

人じゃなかったら怖いからな……慎重に近づくとしよう。

物音のするほうに気配を消して近づく……祖父に習って剣道を少し
やっていただけ気配消す練習なんてしていない。
気分の問題だ。

近づいてみて驚愕した。

「なん……だと……」

なんて言っただけを紛らわさないとやってられない。

熊みたいなのがそこにいた。体格的にみてそう判断したんだが……
これはヤバイ。

その熊を更に大きな何かが貪っている。

ヤバイヤバイヤバイ！！

熊や狼ならともかくあんな物に襲われたらあの熊みたいになっ
てしまふ。

可及的速やかに此処を離れなくては。足音と息を殺して慎重に離れ

ないと。

此処でお約束の枝なんか踏んで物音を立てるようなドジな真似なんかしない。

慎重に……

ガサッ！

「っ！！」

……決して僕じゃないですよ。ホントに。

物音がした方を見ると何やら小さな動物がこちらを伺っていた。

「……………」

振り返ってみると其処にいた何かは此方を見ていた。

いやいや……勘弁してくださいよ。

「っ……………はっ、くう！」

引き離せない！ どころか少しずつ距離が縮まっている気がする！
とりあえず明るい方へ走っているが後ろのストーカーが諦めてくれない。

だんだん足音が近くなっている気がする。

僕は美味しくないよ！？

絶対さっきの熊みたいなやつの方が肉も多いに決まってるよ!!
何でこっちにくるんだ。

泣き言を口から洩らす余裕もない。息が上がる。足が上がらない。
足には自信があるが足場の安定しない森の中で必要以上に体力が奪
われる。恐怖で緊張し更に思うようにいかない……

「っ……!!」

瞬間、背筋に悪寒が走った。

咄嗟に横に跳ぶと今まで走っていた所を何か大きなものが過ぎった。
目の前に出たのは毛皮に覆われた何か。さっきから追いかけて来て
いたやつだ。よく見ると狼に似ているが正面から見ただけで自分の
身長を超えている。顔は真っ赤に染まっっていて先ほどまでの食事の
跡が窺える。

既に立ち上がる気力すらなく恐怖に震える。

ヤバイヤバイヤバイヤバイ!!

それは此方に向けて跳んできた。

恐怖が膨れ上がり体の奥から何かが急速に広がる感覚。

そこで僕は意識を失った。

第0話<プロローグ>（後書き）

おわり……え？

まだ主人公の名前も出てないので続きます。

第1話<四季>

「……ん」

（体が重い。なにがあつたんだ？ テロで殺されて、それで……）

微かに意識が戻った青年は地面に横たわったまま回想する。

（森の中で彷徨って……）

「美味しくないよ!？」

「……っ!？」

食べられる前に見た光景を思い出し、叫びながら勢いよく起き上がる。体は重い感じがするが特に痛みは無い。

（味見もされなかったのだろうか。）

あの状態で無事だったことが信じられない。あの巨大な狼が目の前に迫る瞬間が鮮明に思い起こされた。背中を冷たい汗が流れる。

「夢……か」

無事なところを見ると夢だったのだろうと考える。妙にリアルな夢を見てしまったようだ。最早何処から何処までが夢だったのか分からない。

（テロに巻き込まれたのも夢だったのか？）

「目が覚めました？」

「え？」

不意に声をかけられて其方を見ると、其処には見たことも無いような美少女がいた。年齢は青年と同じくらいか、少し下の金髪の少女が椅子に座って青年を見ていた。艶やかなロングの髪は少女の整った顔立ちによく映える。透き通る碧眼は青年の姿を捉えている。少女の姿に思考が停止し、しばしの間惚ける。

「……………」

「……………聞いてます？」

少女は何かを青年に話しかけていたらしい。

「あ、すみません。聞いてないです」

惚けていたことを恥ずかしく思いながら何とか返答する。

（あ、聞いてないですなんて失礼だよな……。まあ実際に聞いてなかったんだから仕方ない。）

「……………。ディゴウの森で何があったのか教えてもらえますか？」

聞いたこと無い地名に青年は疑問を口にする。

「ディゴウ？」

「あなたがいた森のことです。二日前あなたが倒れていた森です。覚えてないですか？」

「いや、森にはいたけど……………二日前、ですか？」

（どうやら二日も眠っていたらしい。ということはもう九月になったのか。明後日からバイトが入っていたっけ。帰るのに時間がかかりそうだから後でバイト前に電話を入れておかないといけないな。留学で結構お金を使ってしまったから少しバイトを増やした方が良さそうか。大学卒業してしばらく暮らすには問題ないが、親が残してくれたお金は出来るだけ残しておきたい。）

これからのことをつらつらと考えていると少女から再び聞き覚えの無い単語が聞こえてきた。

「ええ、今日はテルトゥリアー巡月の七日です」

「……テルトゥリア？　って、なんですか？」

とりあえず疑問をそのまま投げかける。彼女の言い回しから今日の日付を言っているのだろう事は推測できるが。

「……大地の神の名前です」

「大地の神？」

「ええ、風の神ヴァンテセラ、火の神フォティエナ、大地の神テルトゥリア、そして水の神オースイオ。その名前は風の季節、火の季節、地の季節、水の季節のことも示しています。常識ですよ？　覚えてないんです？」

「いや、そもそもそんな神様なんて知らないですけど」

「……」

「……」

二人の間に重たい沈黙が流れた。そんな神様の名前は青年には聞き覚えが無い。それに、四季を表すのに風や火、地や水を用いることもなかった。

（この際分らないことは置いておいて現状の把握に努めることにしよう。）

「……えっと、ここは何処ですか？」

当たり障りの無い内容から確認する。意識を失っていた人間の常套句だ。

「……ここは私の家です。貴方はディゴウの森で気を失っていて、色々と聞きたいことがあったので保護しました。森で何があったか聞かせてもらってもいいですか？」

彼女も様々な疑問は置いておいて聞きたいことだけ先に確認することにしたようだ。逸れていた最初の話題に話が戻った。

「それはいいですけど……それならあとで君に聞きたいことがあるんですけど、良いですか？」

（此処が誰の家かは分かったが、此処が何処かという疑問は解消されていない。後でもう一度聞いてみないといけないか。）

「……いいですよ。私はフランシエシカといいます」

君という呼び方をしたためか彼女は名前を名乗った。そこで青年も自己紹介をしていなかった事に気付く。慌てて謝罪をし自己紹介を始める。

「あ、すみません。僕ははつ一といいます。四季しき一です」

「シキというと季節の四季ですか？」

「ええ、四季が苗字で一が名前ですね」

「みょうじ？」

フランシェシカは四季は分かるのに苗字が何か分からないらしい。

（外国の人みたいだからかな？）

「あ、えーとファミリーネーム？ 家名ですか？」

「ということはハジメ・シキですか」

「そうなりますかね……？ あれ、そういえば日本語が通じてるんですか？」

（日本語で話しているつもりなのだが、此処は日本なのだろうか？）

「ニホンゴ？ 話しているから言葉は通じてますよ。この世界で生まれたものには皆言葉の加護がありますからね。会話は誰とでもできますよ。文字はいくつか種類があるので……って常識です」

（コトバノカゴ……？）

「え。言葉の加護ってなんですか？」

再び疑問に思ったことを口に出す。自己紹介を始めたことで再び話題が逸れてしまっているのだが……

「……」

「……」

（……どうやらこれも常識というもののようだ。）

「……とりあえず、森であったことを先に聞いていいですか？」

逸れてしまった話題を元に戻すべくフランシェシカはきりだした。

「……………そうですか」

ハジメが森での出来事をフランシェシカに説明すると、彼女は沈痛な面持ちで一つ頷いた。ハジメが話をしている間フランシェシカは特に口を挿むことなく黙って聞いていた。

「ええ。あれはなんだったんですか？ 見たことのない動物だったんですけど」

「それはおそらくクルオルウルフだと思う。最近あの森で目撃されていた魔獣ね。私もあの魔獣を討伐しにディゴウの森に行ったんだけど、現場の様子と貴方の話を聞いたところもう死んでるようね」

「……………？ 死んでるって……………そのクルオルウルフ？ とか言う」

（僕が死んでいないのだから何かあったのだろが、死んでいるとはどういうことだろうか。話し方からすると死体の確認をしたわけではなさそうだけど。）

「ええ。おそらく貴方の魔力の暴走で跡形もなくなね。酷いもんだったわよ。普通の人間の魔力が暴走したところであそこまで被害が出ることなんてないのに。精確には分かんないけど視た限りじゃ貴方の魔力は私以上ね。いえ、たぶん貴方より魔力が高い人なんて居ないんじゃない？ 貴方本当に人間なの？」

（魔力？ 暴走？）

「人間ですけど……。それより魔力ってなんですか？ そんなもの無いと思いますけど」

魔力というとファンタジーとかでよく聞く単語だ。物語の中ではよく聞く言葉だが、実際にそんなものがあると聞いたことは無い。先ほどから神の名前だとか魔力とか聞いていると何故か変な事に巻き込まれているような気がしてくる。

（……宗教の勧誘だろうか。）

「……貴方それ本気で言ってるの？ さっきから常識も知らないし」「いや、常識と言われても。知らないものは知らないですし」「そう。……そういえば貴方何処から来たの？ 常識も知らないし何処かの山の中で暮らしていたのかしら？」

（なんだか失礼なことを言われた気がする。……まあ良いけど。）

「街に住んでましたけど……日本です」「ニホン？ 聞いたこと無い国ね。えっと……この地図のどの辺りかしら」

フランシエシカは部屋の棚から折りたたまれた少し茶色掛かった紙を引っ張り出す。地図らしいそれを広げてハジメに見せる。

（日本は太平洋の……太平洋……の……）

「……えつとこの地図って何処の地図ですか？」「……世界地図だけど」

見たこと無い地形の描かれた世界地図らしきもの。大陸のようなも

のは三つ。ハジメはどの大陸の地形も見ることが無い。地図に書き込まれている文字も読めない。

「ははは、冗談きついですね。こんな世界地図見たことないですよ」

「……」

「はは……は……」

「……」

再び二人の間に重たい沈黙が落ちた。

「異世界……ね。本当にそんな所があるのかしら」

フランシエシカに森に来る以前のことを説明した。今まで居た世界がどんな世界だったのか。そして、どのようにして死んだのか。

「いや、僕も分かりませんよ」

本当に分からない。しかし、今が現実だというのならそういう事なのだろう。元の世界で銃で撃たれたことも、この世界で生きていることも。

（あちらの世界はどうなっているのかな。日本のニュースなんかで「行方が分からなくなっているのは日本人留学生の四季一さん。現場に所持品と共に血痕が残されており……」なんて報道されているのだろうか。そもそも死体は残っているのだろうか。）

「その話が本当なら、貴方はそちらの世界で死んでるんじゃない？」
「まあ、あの痛みは本物だったけど」

（傷が残っていないということは別の肉体なのだろうか……治っただけなのか。）

「そちらの世界で死んで、原因は分からないけど此方の世界にその姿で転生した。そう考えるべきでしょうね」

「あの傷で生きていられるとは思えないよね……もう戻れないかな」

身内も居ないため、あまり困ったことにはならないだろうが、バイト先とか大学とかにはそれなりに迷惑が掛かるかもしれない。

「少なくとも異世界へ行ける、なんて話は聞いたことが無いわね」

この世界でもそんな話は聞いたことが無いようだ。帰る方法を探しながら此方で暮らしていくしかないということだろう。

（……向こうの世界にあまり未練も無いけど。）

「そっか……これからどうしようかな」

「とりあえず、この世界のことを話すから。それから考えましょう？」

「そうですね」

とりあえず此方の世界のことを聞いてから考えるのもいいだろう。魔力なんてものがあるくらいだから魔法なんかもあるだろう。

少しわくわくしてきたのはとりあえず内緒だ。

第2話<サルトクリゼ>

神々の加護の恩恵を受けた世界、サルトクリゼ。この世界で生まれたものは皆、様々な加護の恩恵を受けて暮らしている。その最たる物が魔法である。この世界に暮らす者は誰一人例外なく魔力を保有している。最もその資質は個人で大きく異なるのだが、資質を持たないものは魔力こそあるが自ら魔術を行使することが出来ない。

魔術の属性にも様々な物がある。最も一般的な属性は五つで、無属性、地属性、水属性、火属性そして風属性だ。資質を持つ者の殆どはこの五つの属性の特性を示す。

更に極稀に空属性、時属性、光属性、影属性に資質が有る者も居る。現在確認されているこの四つの稀属性の魔導師は空が二人、光が五人、影が七人。時の属性を持つものは二十年ほど前から確認されていない。

魔術の資質を持つ者の多くは一つから三つの属性に目覚める。二つの属性の資質を持つ者が最も多く、次が一つの属性、更に少なくとも一つ三つの属性となる。四つの属性を示すものは更に稀で、確認されているものは世界でも二十人程。稀属性を持つものは皆この内に含まれている。

この資質の組み合わせは様々であり、発現し易い属性順に並べると無>地>水Ⅱ火>風>>影>光>空Ⅱ時と考えられている。この資質は生まれた時から決まっいて生涯変わることはない。

この大陸“カドラグニス”は様々な種族が国家を形成して暮らしている。エルフ族、獣人族など、人間族以外の種族も存在する。人種の多くはその他の種族を亜人種と呼び区別している。カドラグニスに点在する国家の殆どは人間族の国家であり、亜人種の人権を認めていない場合も多い。

他種族より魔力も力も弱い最も人口の多い人間族は、国家を成して

暮らしている。魔力の低い人間族は寿命も140〜200年と、獣人やエルフなどの他の種族に比べて短命だ。他種族間の半血種族も存在し、その場合も魔力によって大体の寿命が決まっている。この半血種族も人間には亜人種とされて区別される。

ハジメが今居る此処はカドラグニスの大国の一つであるサルクノール王国にある一都市から少し離れた森の中にある。サルクノールには他種族も暮らしており、他の国家よりは人間族以外にも比較的暮らしやすい国である。

フランシエシカはエルフと人間の半血種^{ハーフ}で、現在82歳らしい。これは長寿のエルフとしてはまだまだ若く、人間の年齢で考えると成人年齢《16歳》より少し上程度である。最も人間からすれば知識も経験も豊富なため人間の基準で考えることは出来ない。またフランシエシカの魔力はエルフの中でも高い部類に入り、人間との半血種だがエルフの特徴が濃く現れている。

「フランシエシカさんはエルフのハーフなのか」

「ええ。半血種だから耳はエルフより少し短いけどね」

「へえ……触ってみても良い？」

やはり気になってしまふ。触らせてくれないだろうかと目を輝かせながら尋ねる。

「良いわけないでしょう」

「いや、やっぱり気になるといつか。前の世界には人間しか居なかったし」

（獣人も居るということは猫耳やら犬耳なんかも居るのだろうか……。爺さんの家で昔飼っていた犬の耳も気持ちよかったし、触つてみたいものだ）

「自分の耳を触ればいいでしょう。そんなに変わらないわよ」
「むう……」

（そうだろうけど、エルフの耳ということに価値があるんじゃないか……）

未練たらしくフランシシカの耳を眺めていると少し顔を赤くしながら話題が変えられる。

「他に聞きたいことはない？」

「んーと、僕の魔術の属性は分かるのかな？」

魔法があるのなら使ってみたいと思うのは当然だろう。しかし適性がないと魔力があっても使えないらしいためドキドキしながら質問する。

「それは実際に調べてみないと分からないけど」

「どうやって調べるの？」

「簡単な魔術を使ってみるしかないわね。暴走したのだから何かしら適性はあると思うけど」

「……暴走したら何か属性に適性があるって分かるの？」

属性があるだろうと言われて少し安心したが、その根拠が分からなかった。

「ええ、属性を持つもので魔術を学んでいない者は大体子供の頃に一度は暴走するの。貴方ほどじゃないけど部屋の中ものが壊れる程度にね。洗礼みたいなものよ」

「ふーん。……そういえば最初魔力の暴走でクルオルウルフとかが死んだはずだって言っていた気がしたけど」

「貴方の暴走は最悪だわ。周りの森ごと消し飛んでいたもの。家の中や街の中だとすごい被害が出ていたでしょうね」

「え……」

「五十メルデくらいの範囲の地面が抉れてその真中辺りに貴方が倒れていたの」

「五十メルデ？」

「ん？ あー……この部屋の端までが四メルデくらいかしら」

（ということは一メルデが大体一メートルかな？）

「って、五十メルデ！？」

五十メルデが五十メートルだとすると相当な範囲だ。それが消し飛んでいたらしい。

「ええ、森の一角が綺麗になくなっていたわ。その中心にいたんじや、クルオルウルフも一緒に死んじやったんじゃないかな」

「……」

「とりあえずまた暴走しないよう魔力のコントロールを身に付けなさい。属性の魔術が使えるようになれば暴走することも無くなるでしょう」

「……どうやって？」

コントロールを身に付けると暴走も起こり難い。魔力の制御の方法が分からないとどうしようもないが。

「それは私が教えてあげるわ。人間はあまり好きじゃないけど、貴方は異世界の人間だし興味があるわ。魔力もかなり多いみたいだし」

フランシェシカはあまり人間が好きじゃないようだ。人間の多くは

他種族を差別しているみたいだから仕方ないのかもしれないけど、昔何かあったのだろう。

「いいんですか？」

「いいわよ。まあ貴方の体調と魔力が整ってからになるけど。暴走の後は意識を失うし四、五日は魔力を使わない方がいいから」

「よろしくお願いします。フランシェシカさん」

「フランでいいわ。貴方のこともハジメって呼ぶから。あ、それと貴方は簡単に家名を名乗ったけど初対面の相手にはあまり名乗ることとは無いからね。覚えておいた方が良いわ」

（やっぱり貴族なんているんだな）

「初対面の人に名乗らないんですか？ 僕の世界では普通に名乗っていたけど」

「貴方の世界はどうか知らないけど、此処だと家名がある人間は貴族とか王族とか、他にもいるけど少ないのよ。信用できない人間に名乗る必要は無いわ」

「フランも家名はあるの？」

「ええ、フランシェシカ・ラザズ。それが私の名前」

「貴族？」

「貴族は人間の爵位でしょ。エルフの家名はあまり関係ないわ」

「ふーん。……家名を教えてくださいってことは少しは信用されてるって事かな？」

「……」

若干きつめの視線でにらまれた。美人な分、睨まれた時のダメージは大きい。

「じよ、冗談です」

「……しばらくこの家で暮らすことになるだろうからね」

「え、此処に住んで良いの？」

「何処に行く気よ。此処から街まで歩いたら三日ほどかかるわよ？
行きたいなら別にいいけど」

「ここに居させてください」

「……他に聞きたいことは無い？ 魔術の練習も早くても明後日からになるし、聞きたいことが見つからなかったら明日聞いてくれてもいいけど」

「うーん……この世界で暮らしていくために知っておいた方が良
事はないかな」

すぐには思いつかなかったため今日のお勧めを聞く。

「……色々あるわよ。言葉は通じるけど文字は覚えないとだめね。
ギルドなんかで依頼を受けるにしても読めないとだめだし。魔術と
一緒に覚えていった方がいいわ。文字が読めれば本も読めるしこの
世界のことも色々調べられるでしょう」

「文字か……。言葉が通じるのに文字は読めないのは不便だね」

「言葉は加護を受けた時点でこの世界の誰とでも話せるからね。貴
方が喋ってる言葉も違和感無いわよ？」

「……そういえばそうかも。なんか日本語で話してるけど日本語じ
やないみたいなの……」

（そもそも今考えているのも何語で考えているのか分からなくなっ
てきた……思考がこの世界の言葉に統一されたのかな……）

「文字は幾つか種類があるって言ってたけど、それは？」

「この世界は言葉も共通だから文字も基本的には共通よ。古代文字
なんかもあるからね。覚える必要は無いかな」

文字は一種類だけでいいのか。元の世界じゃ考えられないな。ということは通貨なんかも共通だったりしないのだろうか。

「それじゃあ、お金について」

「お金か……ちょっと待ってね」

言って部屋を出て行き、戻ってくるとフランは小さめの袋を一つ持っていた。ベッドの上に袋から取り出した硬貨を四枚並べる。

「この銅貨が基本で一エイド。銅貨十枚で銀貨一枚、銀貨十枚でこの小金貨。小金貨が十枚でこの金貨一枚ね」

一緒に聞いた宿の代金や食事の値段から通貨の価値は銅貨が百円くらいで小金貨が一万円くらいの価値があることが分かる。小金貨から通貨の単位が変わるようで、小金貨は一アルド金貨とも言われている。

通貨には他の金属も入っていてその比率は決められていてギルドとというのが出来て暫くして世界共通になったようだ。偽造は魔術で簡単に分かるようになっていたとの事だ。

「あとは……さっきも言ってたギルドって言うのは？」

先ほどの会話に出てきた気になる単語をあげた。

「ギルドは幾つか在るわ。一番人が多いのは冒険者ギルドね。これは世界中にあるわ。後は各国で魔導師ギルドや商人ギルドなんかがあるかな。商人ギルドは国を跨いで在る事も多いけど、魔導師ギルドは基本的に自国内にしかない」

「冒険者ギルドか……定番だな」

異世界ときたら冒険者ギルドだろう。知っていました。

第3話<ギルド>

「冒険者ギルドか……定番だな」

「ん？ なに？」

小さく呟いた為フランには聞き取れなかったようだ。

「いや、魔導師ギルドが国内だけって言うのは？」

「魔導師ギルドは基本的に独自の魔術の研究なんかをしてるから、他国に設置するメリットは無いわ。優秀な魔導師は自国で困っておくのが普通だから。といっても、冒険者ギルドにも登録している魔導師も多いからあんまり意味無いけどね。それから冒険者ギルドと魔導師ギルドや商人ギルドの重複は出来るけど魔導師ギルドの重複は禁止されているわ。」

「フランもギルドに入ってる？」

「私は冒険者ギルドとこの国の魔導師ギルドに入ってるわね。魔術学院に入った人はみんな魔導師ギルドに入らされる。私も昔それで登録したの。今は基本的に冒険者ギルドで依頼を受けてるから魔導師ギルドはあまり関係無いわね」

「それじゃあ僕も冒険者ギルドに入る方がいいのかな？」

「それは自由にすればいいと思う。お金稼ぐなら冒険者ギルドに入って依頼をこなしていくのが早いかな」

冒険者ギルドの依頼は魔獣の討伐や護衛、他にも雑用やら色々ある。ハジメを見つけたのもギルドの依頼でクルオルウルフを討伐するためにデイゴウの森に来ていたらしい。デイゴウの森に着く直前に森で強力な魔力爆発が起こって駆けつけたところにハジメが倒れていたようだ。その後ハジメに結界を張って周囲を検索しクルオルウルフが居なかったためハジメを自宅に保護し、ギルドに森の様子を報

告。ハジメの存在を隠して原因不明の損害があった事と、周囲にクルオルウルフが居なかった事を報告し、現在ギルドで現場の調査が行われているようだ。もちろんフ란の依頼は達成したことはなかった。ギルドの調査完了を待って依頼の扱いが決まることになっている。

ちなみにディゴウの森は此処とはかなり離れていて、此処には無属性と風属性の複合最上級魔術の転移で来たらしい。属性の組み合わせが必要で難しく、消費魔力が多いためエルフでも何度も仕えないらしい。

空属性だと単体の属性で空間転移があるようだ。

「そっか。やっぱり冒険者ギルドってランクがあるのかな？」

「ええ。低い方から白、黄、青、赤、緑、黒、白銀かな。色の元は魔術の属性って言われているけど本当かどうかは知らない」

「フ란は何処？」

「黒ね。白銀は十人くらいかしら。白銀なんかは特別な事がないとなれないわ」

一番多いのは赤で緑から黒にいくと少なく、白銀は稀。稀属性を持つて冒険者をしている魔導師で白銀は二人。空が一人と光が一人であとは剣士やら魔導師が数人いるらしい。

冒険者ランクはギルドカードの模様の色が変わるらしい。フ란のカードを見ると何か文字と文字のないスペースに綺麗な模様が描かれていた。植物がモチーフのような模様が右下角から文字を避けながら全体に広がっている。この模様も一人ひとり微妙に異なる。

フ란が魔力を通すと、更に文字が浮かんできてそれを避けるように模様が変化する。この文字は本人の魔力でのみ浮かび上がり、身分の証明にもなる。

「白銀になるとギルドからの指名の依頼が主になって何処かの国で

落ち着いて活動することが少なくなるらしいわ」

「フランは白銀を目指してるの？」

「そんな面倒なことしないわ。黒で十分に稼げるし」

どうやら面倒なことは好きではないようだ。街から離れた森にいるのも人付き合いが面倒だからなのか。

聞いてみると近くの街にも一軒家を所持しているらしく、依頼を受ける際は其処を拠点にして活動しているという。ギルドランク黒という危険度は高いが高額の依頼も多く、複数の拠点を持っている者もいる。フランはこの森の家と街に一軒、離れた別の都市にも一軒持つているが一年の多くはこの家で過ごすことが多いとのことだ。

「これくらいかしら？ そろそろ夕食の時間だけど」

「それじゃあ最後に食事について」

食事の話が出たので気になることを聞いておく。

「食事？ 夕食ならこれから用意するけど？」

「一日何食かな？ 前居た所では三食だったんだけど」

「私たちも三食ね。二食や四食の所もあるけど、冒険者はみんな三食じゃないかな」

「よかった。二食とかだったら耐えられないから」

冒険者は朝食事をして移動し、昼に休憩を入れて食事。夜営の準備をして夕食を食べるというパターンが多い。何度も食事の準備をするのは移動の効率を下げてしまう。

「それじゃあ夕食にしましょうか。他に何か聞きたいことがないか考えておいて」

準備をするからとフランは部屋を出て行った。

暫くしてフランが食事を持って部屋に入ってきた。

夕食のメニューはパンとシチューのようだ。器から湯気が上がり美味しそうな香りが漂って来た。

「動けるでしょ？ こっちに座って」

部屋にあるテーブルに食事を置いて着席を促してくる。ハジメはベッドから起き上がってテーブルの方に近づく。フランも席につき、一緒に食事を始める。

「いただきます」

「……？」

「あー食事前の挨拶みたいなもの。この世界では何かある？」

「そうね……神に感謝の気持ちを伝える言葉を言うところもあるかな？ わたしは面倒だからしないけど」

「そうなんだ。あんまりしない方がいいか」

「するならこの世界の作法でやったほうがいいわね。異世界の習慣を色々やってたら目立つちゃうかもしれないから」

ハジメも異世界出身であることを広めようとは思わないため素直に頷き食事を始める。

「美味しい」

「そう。ハジメの世界での食事がどんな物か分からなかったから、口にあったようなら良かった」

「こんな料理は元の世界にもあったよ」

シチューに入っている野菜は中まで火が通っていて軟らかく、味がよく浸み込んでいた。フランはパンを少し千切ってシチューに浸けて食べていた。ハジメはパンを千切ってみるが地球のパンほど軟らかくなく、フランと同じようにシチューに浸して食べる。パンの改善が必要なようだ。がパンの作り方は知らない。

（こんなことならパンの作り方を調べておけばよかった……。何かで読んだことも有る気がするけど思い出せない）

この世界でも柔らかいパンがあることを願いつつパンを口に運ぶ。一人暮らしをしていたので料理はある程度出来るがパンを自宅で作ったことはない。

食事を終わるとする事が無くなった。まだ日が暮れてあまり時間が経ってないため夜遅い生活をしていたハジメは暇を持て余していた。

「フラン。今から時間あるかな？」

「あるけど、どうかした？」

「今から文字とか教えてもらっていいかな？」

「いいわよ。すぐ覚えられるわけじゃないだろうけど、言葉と意味が分かるからある程度覚えたら簡単に読めるようになるでしょう。読みながら口に出したら自然に意味が分かるんじゃないかな」

言葉の加護がある為か文章を言葉に出来れば意味が分かるらしい。文字の数は比較的多いみたいだが言葉の意味が分かる大人なら簡単に習得できるそうだ。

（英語の文章を見ても意味が分からなくても正確に読み上げれば意味が分かるようなものか？）

なんとも不思議な事だ。これならこの世界の識字率はかなり高くなりそうだ。音読できれば意味が分かるのだから。しかし人前で音読は結構恥ずかしいので、見ただけで意味が読み取れるようにしっかりと勉強しておこう。

フランに習っている間、英語で喋っている意味を日本語で考えているような不思議な感覚がした。慣れれば文章の発音と意味と思考が一致するらしい。文章を見ただけで理解するのは暫く先になりそうだ。

「それじゃあもう遅いしこのくらいにしましょうか」

「もうそんな時間？　ここがどのくらいの時間で一日が経つのか知らないから分からないな」

「時計があるから見てみる？　時間の感覚が違うと慣れないわよね」
「そうだね」

時計を借りて見てみると円が四つに区切られている。この目盛りの意味を聞いてみると一目盛り三刻で、最初の目盛りが朝の鐘の時間、次の目盛りが昼の鐘、最後の目盛りが夕刻の鐘の時間に合わせてあるということだ。何処の町にも鐘があるらしく、国ごとに鐘の時間が決まっているらしい。国が変われば鐘の時間が少しずつ異なるらしいが、朝、昼、夕の鐘の数はどこも同じらしい。

短針と長針があるが見ているだけではどのくらい時間が進んだのか良く分からない。明日から体感の時間を確かめておく必要があると思うだ。

「時計は必要だと思うからある程度お金を稼いだら買っておいたほうが良いわね」

「そうだね。武器なんかも買わないといけないかな。魔術の発動には何か必要になる？」

「初級魔術くらいなら無くても発動できるけど……それ以上だと魔

導具が必要な」

「魔導具？」

「ええ、私が使っているのはこの杖ね。ここに宝石が取り付けられているでしょ？　これが魔導具の核になっているの。杖はおまけみたいな物かな。材質や形状、刻印なんかで性能も値段も変わってくるけど一番大切なのはこの宝石。魔宝石っていうの。そのままね」

「それは特別なもの？」

「魔宝石には特定の属性でしか使えないなんてことはないけど特性はある。大体色で分かるけどこの魔宝石は水の特性ね」

綺麗な藍色の宝石が杖に埋め込まれている。見ただけでその特性が分かるようだが良いのだろうか。

「私の属性は水と風と無属性。他の魔宝石も杖の内部に埋まっているわ。三属性の適性を持つ人は二属性に比べて多くないからどうしても特注の一点ものになってしまう。この杖は元々風と無属性の杖だったけど貰い物なの。デザインや材質、中の魔宝石も結構良い物だから水属性の魔宝石を追加したの」

一点ものを特注するのが面倒だったのだろうか。

閑話くフランシエシカく（前書き）

フランシエシカ視点。

閑話＜フランシエシカ＞

人間を拾った。

元々デイゴウの森にはクルオルウルフ討伐の依頼を受けたためやってきたのだ。森に到着する直前、森の中で爆発的に魔力が広がるのが分かった。一瞬遅れて爆発音が聞こえてきた。急いで駆けつけた先にその人間が倒れていた。

人間の周囲は酷い有様だった。森の中ほどにあり木々が生い茂っているはずの場所が、五十メルドほどの範囲に木が一本も残っていなかった。地面は抉れ地表がむき出しになっていた。

原因を探るためにも、この人間に事情を聞かなければいけないだろう。おそらく魔力の暴走が起こったのだろうが、確証が無い。

周囲を探索・走査しクルオルウルフの反応が無いことを確認し、人間と共に転移で自宅に戻る。

汚れを風の魔法で飛ばした後、客室のベッドに人間を寝かせた。その人間は見たことも無い真黒な髪の色をしていた。顔は整っており寝顔は安らかだった。

一度ギルドに戻り森で爆発痕を見つけたことを報告。クルオルウルフが森に居なかった事から爆発に巻き込まれたのでは無いかと報告しておいた。ギルドから調査の依頼がでるらしい。

ギルドに報告した後、適当に買い物を済ませて自宅に戻る。人間の様子を確認するが目を覚ます気配は無い。魔力の暴走の後は一日か二日意識を失うことが多い。あれが暴走の痕だとすると二、三日は目を覚まさないだろう。

人間が目を覚めたのは保護した日から二日たったテルトゥリアー巡月の七日だった。

「美味しくないよ!？」

「……っ!？」

起きた瞬間大声で意味の分からないことを叫んで起き上がった。夢でも見ていたのだろう。

「目が覚めました？」

「え？」

人間に話しかけると此方を向いて固まった。人間の目は髪と同じ黒色で髪と同様見たことが無かった。

「早速ですが、森で何があったか聞いてもいいですか？」

「……」

人間は此方を見たまま動かない。話を聞いていないらしい。

「……聞いてます？」

「あ、すみません。聞いてないです」

返ってきた返事はそんな言葉だった。

人間はハジメというらしい。

常識が全く無かったが異世界の人間だった。異世界の存在は聞いたことが無かったが嘘を言っている様子は無いため、信じてもいいかもしれない。

話をしている最中ハジメの視線はしばしば私の耳に注がれていた。触って良いかと聞かれたが他人に触らせるようなものじゃない。ハジメの世界にはエルフなどは居なかったらしく、興味があるようだ。

人間は少なからず私たちエルフや獣人などを亜人種と呼び敬遠する。酷いところでは差別したり、奴隷として痛めつけたりされている。私はあまり人間が好きではない。それに私は半血種のためエルフにもあまり良い顔をされないことさえある。

冒険者ギルドに入ってこんな森の奥で暮らしているのも他人を遠ざけるためだった。ある程度お金があれば一人でゆっくり暮らしている。歳の離れたエルフの姉には王都と一緒に暮らさないかと昔から言われているが断り続けている。

ハジメは不思議な人間だった。異世界の人間だからだろうか、エルフと聞いても特に驚いた様子も無く私の耳に対して興味があるらしくチラチラと視線を感じる。その様子が少し可笑しかった。

簡単にハジメの魔力を調べてみたがエルフの私や、姉なんかより遥に膨大な魔力を持っていた。多いことは分かるがどのくらい多いのか私でも分からなかった。彼が目立ちたいのじゃなければ、魔力量を誤魔化す魔導具を渡した方が良くかもしれない。

「……家名を教えてくれたってことは少しは信用されてるって事かな？」

この言葉を聞いた時驚いた。人間に自分から家名を教えたことは今まで一度も無かった。姉の知り合いで相手が知っていることはあったが、自分から名乗ったことは一度も無い。話の流れで名乗ってしまったようだ。つい睨んでしまった。ハジメは別に悪い事はしてい

ないのに。

その後も適当に必要な知識を教えている内に、何時も夕食をとっている時間になった。他人に食事を作ることもあまり無かったし、ハジメは異世界の人間らしいので口に合うものが作れるか自信が無かった。

幸い同じような料理は食べたことがあるらしく安心した。料理も美味いと言ってくれた。何時もより若干力を入れて料理した甲斐があった。

翌日、客室に様子を見に行くとハジメはまだ眠っていた。朝食の準備が出来たので呼びにきたのだが寝顔を見ていると起こすことが憚られる。暫く眺めていたが、我に返ってハジメを起こす。

朝食はパンと簡単なスープだ。食事中にハジメはパンの固さを頻りに気にしていた。どうやら地球というところではもつと軟らかいパンを食べていたらしい。この世界にも柔らかいパンが売っているか聞かれた。

他にも食材について色々聞かれたが、どれも聞いたことが無い物で、知らないと言うとがっかりされてしまった。仕方が無いじゃない。長い間此処で暮らしているんだから、あまり他の国に行ったりしないのだ。

今度出掛けたら何か有るか注意してみておこう。

そういえば誰かと暮らすのはすごく久しぶりだった。何時以来か覚えていない。ハジメは人間だが一緒に居ても何故かいやな感じはしない。冒険者をやっている以上人間ともそれなりに関わるが、ハジメのような感じは初めてかもしれない。

きつと異世界人だからだ。

食事が終わればハジメに文字を教えたり、家の中を適当に案内したりして過ごした。お風呂が無いのか聞かれたが、この家には無い。この家は姉の知り合いの空属性の魔導師に設置してもらった。私は家の近くの川で沐浴しているし、こんな場所に家を用意するだけでも大変だったのだ。建てた当時はお風呂のことなんて考えたことも無かった。

お風呂が無い事を知ったハジメはすっかり落ち込んでしまった。聞いてみれば地球では毎日お風呂に入る習慣があったらしい。取りあえず今日もお湯で体を拭くだけで我慢してもらおう。

ハジメの魔力も大分落ち着いてきたようなので明日には魔術適性を調べることは出来るだろう。

一度魔力が暴走したら魔力を制御する練習をしていなくても自分の中の魔力を感覚的に知ることが出来る。人間はエルフや獣人と違い、子供の頃に魔力制御を学ばないものが多いので、子供の内によく暴走する。魔力も低いのであまり影響は無いが、暴走がきっかけで魔術を学ぶようになる。

魔導具は魔力制御の刻印のある指輪でいいだろう。指輪は無属性の発動具だが特に問題ない。私には少し大きく普段使わないものだから無属性が使えるようならハジメにあげても良いかもしれない。

閑話くフランシェシカく（後書き）

描きたいことを書くのはやっぱり難しいですね。

次は魔術適性を調べます。

第4話<魔術適性>（前書き）

書き溜めているわけじゃないので話がどうつながるか……

二、三章くらいの話までの概要Word2ページくらいしか書いてないし、設定もその都度なので矛盾が無いようにできるだけ気をつけていますが、何かあったらごめんなさい。そのうち設定はまとめようと思います。

まだお金使っていないのに銅貨を十円くらいに少なくなってきた……

第4話<魔術適性>

魔導具には大きく分類すると二つに分けられる。

一つは魔導師が自身の魔術を発動させる、発動具として用いられるもの。一般的には術具や発動具などと呼ばれる。

一つは魔力を持つ人間が魔導具に刻まれた魔術を発動させる、道具のように用いられるもの。此方の方が術具などより圧倒的に使用者が多いため一般的に魔導具と呼ばれている。

魔宝石は基本的に前者の魔道具に使用される。後者にも用いられることはあるが魔宝石自体に術を刻印する必要があり、一度刻印を施すと魔宝石の特性が一つの魔術に固まってしまい、別の術への再利用が不可能になってしまう。そのため制作費だけ上がり、不要になった場合には格安の値が付く。また、魔導師が同程度の魔宝石を使用して発動する魔術ほどの効果も出ないため、効率が悪い。そのため特別な意図が無い限り魔宝石に刻印を刻むことは無い。

魔宝石を使用する魔導具にも様々な形状が存在する。

フランが愛用している魔導具《発動具》は一メルデ程の杖の形状をしている。形状もただシンプルなのではなく、美術品としても価値がありそうな流麗な形状をしていた。

「これは？」

「無属性の発動具よ。属性を調べるだけなら必要ないと思うけど、その魔導具は魔力制御の刻印が入れてあるから少しは魔術が発動しやすくなるはずよ。無属性が使えるようならそれはハジメにあげる。」

現在、ハジメが手にしているのは指輪の形状をしている小さな発動具だった。広めのリングに小さな宝石が詰められている。刻印とやらを探してみるがハジメには分からなかった。

「刻印は魔力で刻まれているのよ。普通の人間の目に見えるわけ無いじゃない。私は魔力走査出来るから刻印の魔力が分かるけどね。これは人間の半血種である恩恵ね。」

「人間の？」

「ええ。人間は他の種族にある固有の能力を持っていないの。獣人なら身体強化、エルフは魔力特性かな」

どうやらエルフは魔術に対して高い資質を示す魔力特性というものがあるらしい。同じように獣人も高い身体能力と身体強化の能力が種族として備わっているということだ。

「人間は固有の能力を持っていないけど、個人としては偶に能力を発現させる人もいるのよ。最もその多くは魔術でも代用可能なものだけど、能力を使用する際の魔力消費は格段に小さくなる。私はハーフだからあまり期待してなかったけど運良く魔力走査が出来るようになった」

魔力を感じるだけなら魔導師は可能らしい。フ란の魔力走査は魔導具に刻まれた刻印でも詳細に内容を読み取れるそうだ。刻印の詳細まで読み取れる能力は珍しいようで、走査まで行かない魔力検知などは比較的多い。魔力検知や、走査が出来る人間は魔導師ギルドや商人ギルドに多く所属している。

「へー。僕にも何かあるのかな？」

「それは分からないわね。私も最初に発動するまで予兆も何も分らなかったから。何かがきっかけで能力を自覚して発現することが多いみたい」

「なるほど……」

感心しながら指輪を指に填めてみる。フランが填めると親指にしか合わないらしいのであまり使っていないみたいだ。色々填めてみたが左手薬指にぴったりだった。

「何処に填めているのよ！」

赤くなりながら怒られる。どうやら此方の世界でも薬指の指輪は特別なものらしい。填める前に少し考えたがそういう習慣がないと勝手に思い、問題ないだろうと薬指に填めたが失敗だったようだ。

「薬指が丁度いいから」

「……」

フランは何か言いたいようだったが俯いてしまった。それ以上何も言ってこなかったのとおりあえずこのまま適性を調べることにしよう。

後で聞いたことだが左手薬指は愛の証を示し、結婚や婚約の際に指輪を贈るらしい。このあたりは地球の習慣と同じだった。

「……それじゃあ魔術適性を調べましょうか」

魔術適性は基本的に下級魔術を使用するのが一番早い。今ハジメがしているような魔力制御の指輪などを使えば魔術の未経験者でも比較的簡単に下級魔術を使用できるようになる。

「大切なのは発動のイメージだから。詠唱を教えるからその言葉から魔術のイメージをしてみて」

魔術の発動には必ずしも詠唱は必要ではない。発動のイメージと魔力が最も大切になる。詠唱はイメージを固めるための物で、高位の

魔導師は中級程度までなら無詠唱で発動できる。詠唱は個人でイメージしやすい様に変更することも多いようだ。

『封書』

フランが封筒のようなものを取り出し呪文を唱えると一瞬魔法陣が現れて、その封が閉じられた。

「……」

「……これが無属性の簡単な術かな。他にも念話なんかがあるけど最初に使うのはこの位がいいんじゃないかな」

なんとも地味な魔術だ。今回はただ封をしただけらしい。嚴重に封書をする場合は開封の方法を教えた相手にだけ開封できるように術を組む。普通の手紙などは封蝋などが一般的らしい。

「魔力の込め方は魔術のイメージをしながら発動具に集中するの。息を吐く感覚に似てるかな。一度暴走したから魔力の感覚はあると思うけど、その感覚を息を吐くように発動具に注いであげるの」

体の内側に意識を集中すると、確かに以前には無かった感覚がある。体の感覚器官が一つ増えたような感じがする。

『封書』

開いた封筒を受け取り封が閉じるようにイメージしながら呪文をかける。するとフランの時と同じように封が閉じられた。魔法陣は見えなかった。

「初めての魔術が地味……」

「無属性は適性があるわね。風と水は手本を見せてあげられるけど地と火と稀属性は呪文とイメージを伝えるから、自分でやってみるしかないわ」

その後風、水とフランの魔術を手本にしながら続け、魔導書を読み上げてもらい地、火、光、影、空、時と下級の魔術を使っていた。

「地属性以外全て適性があるなんて……。魔力からして異常だけど、これは……」
「……」

結果、ハジメの魔術の適性が異常に高いことが分かった。現在最も有名な空属性の魔導師でも四属性しか適性が無い。しかしハジメには八属性に適性があった。歴史上最も優れた魔導師は九属性全ての適性があったと伝えられているが、ハジメはその魔導師に匹敵するほどのものだった。

「これはあまり知れない方が良いと思うわ……」
「だよね……」

このような高い資質を持つ者がいるとなると様々な国が囲い込もうと画策する可能性は高い。実際、稀属性に適性を持つものの殆どは何処かの国で囲われて他国に流出しないよう、半軟禁状態にある。それが全ての稀属性となると先が見えている。

「人前では火、水、風、無から三つほどに絞って使用するようになるべきだと思う」
「どれがいいかな？」

「暫くここに住むようなら風と無属性で転移魔術が使えるようにした方がいいわ。ハジメの魔力なら街に行くにも転移魔術を覚えて移動した方が楽だし」

火属性はそのまま火や熱を扱う。水属性も液体などの扱いが一般的で、他に治癒の魔術にも効果を発揮する。風属性も治癒に効果があり水と組み合わせると複合治癒魔術が可能になる。風は気体を扱う特性もあり、一般的な結界等も風属性が代表的だ。無属性は最も使用者が多く、他の属性との組み合わせるものが多い。軽量の物の転送などは無属性単体で発動できる。念話なども無属性術者が必要になる。

「火属性なんかは魔導具があれば火はおこせるし、水と風がいいかもね。私が言うのもなんだけど水と風と無属性があれば、よほどの事が無い限り大丈夫よ」

「そうしようかな」

「一人で冒険者続けるにしても転移が使えれば都市間の移動もかなり楽になるしね」

「……ここに居ちゃいけない？」

「それは……いいけど。冒険者になって家賃と食費ぐらい払いなさい」

「うん。よかった。……指輪も貰ったし」

「……」

最後の言葉には特にコメントは返されなかった。

正直自分でもおかしいと感じている。今まで異性に対して此処まで積極的に接したことは無かった。二日間フランと過ごしたが彼女の隣はすごく居心地が良い。初めてフランを見た時の感覚が忘れられない。

この世界でフランしか知り合いがないので不安になっているのだ

ろうか。初めてのことはかりで浮かれているのか。

（嫌われないように気をつけよう……）

この二日間のことを思い出しながらふと気になったことが浮かんた。

「そついえば、魔導具つて自分で作れるの？」

「ええ。何か作りたいの？」

「せっかく火属性が使えるからお風呂でも作ろうかと」

「お風呂？ 昨日言っていた？」

「この世界には蒸し風呂とかしかないのかな？ 湯船に入ったりしない？」

「湯船はあるけど普通の家にはないわね。水も大量に必要だしお湯を温めるのも大変だから」

「お湯を魔法で沸かしたりしないの？」

「火の魔法で温めるって事？ 魔導具を使うにしても人間の魔力じゃ効率がよくないわ」

「ということは魔力が高ければ出来る？」

「出来るでしょうね」

とりあえず実現は可能なようだ。魔力についてはフランからお墨付きを貰っているから大丈夫だろう。

「フランは普段どうしてるの？」

「私は普通に沐浴してるけど……この家の近くに小川が流れているから」

フランは沐浴しているらしい。この二日間ハジメはお湯で体を拭いていた。

せっかく火属性や水属性に適性があつたので浴槽という名の魔導具

でも作ろうと思う。

お風呂のことを考えながら文字の練習用に何枚か貰った紙にお風呂について書き込んでいく。檜木とかあれば檜木風呂が作りたい。檜木風呂の妄想を絵に描きだしていく。

「……………何やってるの？」

フランが手元の紙を覗き込みながらなにやら驚いた顔をしていた。

第5話<能力発現?>

「……何やってるの?」

「何って、お風呂作りたいなと思って」

絵を見たのなら話の流れから分かっていると思ったのだが。驚いた顔をしているのがよく分からない。

「あ、もしかして紙使ったのが拙かった? 文字の練習用にくれたから紙の価値は高くないのかと思って……ごめん」

「それは別にいいわ。その紙はそこまで高くないから。」

「そっか。ならなんで?」

「その絵……魔力が込められてるから。普通のインクで書いた文字や絵に魔力は込められないんだけど」

「魔法陣は?」

「魔法陣は魔力で形成されるのよ。魔法陣を、発動せずに大量の魔力で維持し続けて刻印になるの。その指輪のリングには刻印が魔力で刻んであるって言ったでしょ? 刻印は魔法陣そのもののよ」

「へえー。それじゃあ魔導具を作るためには魔法陣が必要になるのか」

「さっきハジメは魔法陣を作らずに魔術を発動していたけど、魔導師なら自分のイメージを魔法陣として形作ることが出来る。初級や中級で魔法陣無しで練習していたら上級に行くとき大変よ。魔法陣を魔力で作る。これが出来て初めて魔導師としては一人前ね」

「……イメージを魔法陣にする?」

「んー、正確には違うけど……イメージを魔力として体の外に出すときの魔力の形っていうのかな。未熟な魔導師だと魔力が拡散して魔法陣の形を取れなくて見ることが出来ないけど、魔法陣の形を形作れるようになれば魔力が拡散しないし、消費も減る。魔術を発動

するとき体の外に出た魔力をしつかり捉えることが出来れば魔法陣も綺麗に現れるわ」

通りで自分の魔法陣が見えないわけだ。魔法陣無しで発動する才能でもあるのかとちょっと思ってたけど違ったらしい。未熟者だそう
だ。

「で、話は戻るけどその絵はどうしたの？ 魔力がインクというか絵自体に宿っている様に見えるんだけど」

「どうって、風呂の絵を描いただけなんだけど……」

「描く時は何してたかわかる？」

「檜木風呂の妄想をしたかな。こんな風呂がほしいなと」

「魔力を込めてたんじゃないの？」

「込めてないと思うけど……」

「……」

「……」

フランにジト目で見つめられる。若干目が据わっているけど美人に見つめられると恥ずかしくなってしまう。

「な、なにか？」

「……さっき魔法陣の話をしたでしょ？ イメージを体外に出すときの魔力の形。それに近い気がしたから魔術じゃないかと思ったけど……もしかしたら能力の一部じゃないかと思って」

「え、能力がある！？」

「まだ分らないけど。絵に魔力を込める能力とか意味不明だわ。たぶん何か意味があると思うんだけど、私には分らないわ」

「……それだけの能力とかないよね？」

「もしかしたらそうかもしれないわよ？」

ニヤツと笑ってこちらを見る。ホントにそれだけの能力だったらがっかりだ。フ란の魔力走査では魔力は分かるけど絵は魔法陣じゃないので用途までは分からないらしい。

「とにかく能力に関係あるとしたら、色々調べてみるのがいいと思う。その絵と同じように何枚か描いてみたら？ 後でまた紙をあげるから。無駄遣いはしないでね」

「ありがとう。やってみるよ」

「それじゃあ、またまた話が戻るけど、風、水、無属性で良いのね？ 私もこの三つなら教えられるし、上達ははやいと思うわ。他の属性は幾つか魔導書があるからそれを読みながら練習ね。属性の使い方と特性を覚えたらそのうち自分で魔術を組めるようになるわ」

「うん。おねがい」

「それじゃあお昼にしましょうか。お昼からは少し魔術の練習をしましょう。転移魔法位まではさっさと覚えてもらうからね」

「それって、複合の上級魔術って言ってなかった……？」

「最上級よ？」

「……」

結構なスパルタになりそうな予感。

その日の特訓が終わったのは森の広場に夕日が射した頃だった。ハジメの上達は目を見張るものがあり、風と水の中級魔術までも魔法陣が綺麗に組める様になった。火属性や稀属性は後回しで、フ란が言っていたようにまず複合最上級魔術の転移を覚えさせるつもりだよ。

「一通り中級は組めるようになったと思うけど、どう？ 魔法陣が

無意識に綺麗に現れるようになったかしら？」

「無意識って……。まだそんな境地まで至ってないよ」

「正直一日でここまで出来るとは思ってたけど、明日には二種属複合くらい出来るようになるんじゃない？ エルフでさえ魔力制御には時間を掛けるのに半日だなんてね。魔力も減っている様子もないし、益々化け物ね」

「化け物って……ひどい。僕も正直こんなに魔術を覚えるのが早いのはどうかと思うけど。魔術といえば魔法使いの師匠に弟子入りして一つずつ教わって行くと行ってたから」

「人間はそうでしょうね。エルフは基本的に親から学ぶことが普通だと思うわ。私はお……。姉から教わったわ」

フランにはお姉さんが居るらしい。少し言葉に詰まったのが気になったが話の流れを遮るのもよくないし、言い直したのだから気にしないことにしよう。

「お姉さんが居るんだ？」

「ええ。この魔導具の杖も姉から貰ったの。昔、姉が使っていた物に私の水属性の魔宝石を追加してもらって使ってる。別に追加する必要は無かったけど杖を貰った後に姉からこの魔宝石を貰ったから」

魔宝石は宝石が膨大な魔力で変質したもので、それ自体が特定の魔力や属性を持つものではない。元になる宝石の種類によって特定の魔力と相性が良く、術発動の際に一種のパスや増幅器の役割をになう。相性が良い魔力は増幅される。

魔宝石が詰められる魔導具本体は、材質により魔力の浸透・減衰率が異なる。体内の魔力は魔導具を通り魔宝石内部で魔法陣を構築する。発動の際に魔導具外部に魔力が魔法陣の形を保ったまま放出され、魔術としての現象が発生する。

もちろん、大気中に魔法陣を直接構築することも可能だが、一度体

内から放出された魔力は拡散しやすく、複雑な魔法陣は形を保って
いられない。人間の体内は魔力が溢れているため体内での魔法陣構
築は難しく、魔力によって変質した宝石は魔力を通しやすく、保持
しやすい。それと同じくらい放出もし易く、魔法陣構築の場として
は最適になっている。

「でも三つも魔宝石があつたらどれで魔法陣を構築するのか分から
ないよね？」

「魔力は操作できるんだから慣れれば出来るように……明日からは
魔宝石が複数付いている魔導具で練習しましょうか」

「あれ、そういうことになるの……？」

「といつても、他に複数の魔宝石が付いている魔導具が無いわね…

…」

「それじゃあ、あしたは」

「明日は街に行きましょうか。食材なんかも無くなって来たし、つ
いでに魔導具も買いましょう」

「お金が」

「お金は貸してあげるから安心して。そのうちギルドで依頼を受け
て返してね」

「それはわる」

「長く使うことになるでしょうから、それなりに良い物じゃないと
いけないかな」

「……」

言葉を挟む暇も無い。今日の特訓もスパルタに近いものがあつたが
暫く続きそうだ。なんだか魔術の練習になってから性格が変わって
いる気がする。

「それにハジメはまだ街の様子とかも見たことが無いでしょう？
ハジメの言つてた都会とやらとは違うけど賑やかな所よ。ついでに

服なんかも見て回りましょうか。その服を何時までも着ているわけにもいかないし、ローブなんかも買っておいたほうがいいわ」

「……」

「どうしたの？」

それでも色々と考えてくれているらしい。初めての異世界で拾ってくれたのがフランだったことに改めて感謝した。森の中で美味しく頂かれそうになったりしたけどフランと出会えたのだから良かったことにしておこう。

「いや。改めてフランに感謝してたところ」

「……？ まあ、いいけど」

何のことが分からないという顔をするフラン。人間は嫌いだといっていたけど、異世界人のハジメに色々と親切にしてくれる様子はそんなことを微塵も感じさせなかった。これが本当に素顔なのだろう。

「それじゃあ汗もかいたみたいだけど、今日もお湯で体を拭くので我慢してね」

「あ、……はあ。風呂が出来るのは何時になることが」

「もう此処に住む気満々ね……。夕食の準備をするから、その間に汗を拭いておきなさい」

「了解です」

そう言っただけで家に入っていくフランに続き、ハジメも家に戻る。

台所の脇でお湯を沸かす。これも魔導具で桶一杯分のお湯を温めることが出来る。これを参考にすれば魔導具《浴槽一式》を造れるのではないだろうか。最も、水の量が全然違うので色々と工夫をする必要があるだろうが。

お湯を沸かして客室に戻る。すっかり自分の部屋になっている気で

いるので、自室といっても良いのではないだろうか。布をお湯に浸けて体を拭いていく。お風呂が恋しい。

夕食の時間まで勉強をして時間をつぶす。階下から声がかかり夕食に降りると美味しそうな香りが漂って来た。今日の夕食は肉と野菜を煮込んだスープのようだ。今日の訓練の最中に風の魔法で仕留めた良く分らないけど鳥の肉だそうだ。チキンスープみたいなものだろうと思ったが、鳥はダグミューと言うらしいので、ダグミュースープといったところか。

「明日街に行くことに関してだけど、これを渡しておくわ」
「これは？」

食事の後に、またしても指輪を渡された。
聞いてみると人に認識をずらす魔術刻印がしてあるらしく、意識を逸らすだけでなく魔力量なんかも隠してくれる。影の属性らしく、稀属性の中では安価（といっても基本の五属性よりは格段に高価）で昔買ったそうだ。

今回は少し小さく、小指にしか入らなかった。

第6話<お買い物>

「それじゃあ、まず市に行きましょう。野菜なんかは朝のうちに買わないと」

「荷物になるけど、往復するの？」

「この街にも家があるって言ったでしょ。一旦そこに置いておいて用事を済ませましょう」

フランとハジメの二人は朝からこのマリヴェーラの街に来ていた。この街はサルクノーレ王国内でも比較的大きな街で、フランの拠点にもなっている。フランは街の中に一つ家を買っていて、依頼などで街に泊まる際はこの家を拠点にしているようだ。

「そういえばそんなことを言っていたかも」

「納得したなら市に行きましょう。荷物は持ってもらうからね」
「了解です」

マリヴェーラの市は街の西側にある大きな広場で開かれていた。この場所には三日に一度、市が開かれる。そこには新鮮な野菜や町の外で獲れた肉の他に、街の中で店を開いている商店なども様々なものを販売している。それぞれの店は商品が無くなるか夕方近くになると店を仕舞う為、朝から昼に掛けて、一番の賑わいを見せる。

「そういえば、何か欲しい食材があるとか言っていたわね」

「あー。でもフランは聞いたこと無いんですよ？」

「聞いた事はないけど、見てみればいいんじゃない？ 私が見落としてただけかもしれないし、穀物なら収穫の時期だし麦でも買ってパンでも作ってみれば？」

「フランはパンの作り方知ってる？」

「……麦粉と水を混ぜるんじゃない？」
「……知らないんだ」

パンの作り方を知らないらしい。ずっと市やお店で買っていたらしいので仕方が無いのか。

「自分で作る必要が無いからね」

パンは確かイースト……酵母が必要だった気がするがこの世界ではどうなっているのだろう。粉にイースト入れて水入れて混ぜて寝かす位の事しか知らない。砂糖なんかも入れるんだったかな。先ず酵母を作る必要があるが、果物やヨーグルトで作れると聞いたことがあったような無かったような。米でも作れたような気もするが、お酒だっただろうか。

（実験するしかないか？）

「小麦粉は売ってるのかな？」
「さあ、あるんじゃない？」
「よかった」

小麦粉が無かったら粉引きからしないといけないところだった。適当に野菜と果物、肉なんかを買ってついでに酵母用に小瓶も買ってもらった。お茶の葉も売っていたので一緒に購入した。実はお茶は趣味だったのだ。コーヒーは苦手で気持ち悪くなるのであまり飲まないようにしていた。

市での食料品買出しを終え、一旦フランの家二号に向かう。二号さんは街の東側、つまり市の反対側にあつたため、大量の荷物を抱えて街の中を横断することになった。街の西側は街の人間の住居が多く、街の東側には宿屋や商店、ギルドなどが集まっていて、拠点と

しては近くて丁度いいらしい。北は富裕層が集まっており領主の屋敷も北にあるようだ。

フランの家は東区の南よりであり、周りは商店が数件と市民の住居があるくらいだった。購入当時は元々お店だったらしく、かなり良い物件だった。使用していないときは結界を張って進入できないようにしているらしい。最も、中には殆どなにも置いていないため入られたとしても特に害は無いようだ。

「次は魔導具か、服ね。魔導具は東側にあるし、服は中央に近いところだったかな？ 先ずは服から買いましょうか。私のローブじゃ不恰好だわ」

今ハジメが着ているのはフランのローブである。フランより背が高いハジメには若干丈が足りなかったらしい。ローブというものを着たことが無かったハジメは特に気にしていなく、コートみたいな感覚で身に付けていた。どうやらフランの基準では許されなかったらしい。

服屋に着くとフランはローブを物色し始めた。ハジメはフランに言われて普段身に付けるための服を見ることになった。店内には街で良く見かけるようなズボンや服が並んでいた。洋服屋でバイトをしていたハジメとしては若干不満に感じつつも、出来るだけ違和感の無いものを幾つか選んでいった。

暫くするとフランが幾つかローブを持って近づいてきた。まっすぐ立つように言われ、前方から若干色の違うものを掲げて眺められた。一通り確認すると何も言わずに一着をハジメに渡し、戻って行った。ハジメの意見を聞くつもりは無いようだ。

「店主。これだけお願い」

「ありがとうございます。……合計で三二〇エルドです」

（三三〇エルド……三万二千円くらいか。高いのか安いのか。）

フランは小金貨三枚と銀貨二枚を支払い店を後にした。その場でフランは、買ったばかりのローブをハジメに身に着けさせると、自分もローブを身に着けた。ハジメは髪と眼の色を変えていたが、念のため、ローブについているフードを被っていた。黒髪と黒目はすぐ目立つということで、出発前にフランに変えられていた。

「それじゃ、後は発動具ね。……ハジメは何か武器が使えるの？」
「？ 一応剣術を習っていたけど、実戦で使えるかは分からないよ」
「それなら、剣を持つことも考えて指輪か腕輪の発動具がいかしら」

発動具について話しながら、魔導具を売っているお店に向かう。店内に入ると壁に備え付けられた棚やテーブルの上に様々な物が並べられていた。中には無造作に籠に入れられた杖などもある。

「風か水の発動具はあるかしら。形状は指輪か腕輪のものが良いんだけど」

「風か水ですか？ それでしたら……こちらですね。両属性が使えるものになりましたら、今のところこちらの杖しかないですね。腕輪は現在水の属性のものしかございません。小さめのもので良いのであれば耳輪などもございますが？」

「ハジメ。幾つか試してみなさい。サイズが合わないと思えないから。ピアスなら関係ないから材質や刻印で選んでも良いけれど」

「了解」

フランに促され幾つか指に填めてみる。填められるものは幾つかあったので指輪にすることにした。ピアスは痛そうなので今まで着け

た事が無かった。体に穴が一つ増えるのは遠慮したい。

サイズの合うものからデザインや刻印を基準に選んでいく。結局、水と風の指輪を購入した。風の指輪には今ハジメが着けている無属性の指輪と同じ魔力制御の刻印がしてあるそうだ。水の指輪はサイズを補正する刻印がしてあった。

風の指輪の魔宝石は他のものより若干大きく、他の属性との複合は風の指輪とする様にフランに進められた。

魔導具店から家に向かう途中、フランはギルドに寄ると言って別行動をとることになった。クルオルウルフの一件で経過を確認したいらしい。フランから借りた鍵を使って家の中に入ると家にあった紅茶を淹れて一息つく。紅茶はキャンディに近く、クセがなく口当たりが良い、結構良い茶葉のようだ。これならいろんな楽しみ方が出来るだろう。

紅茶に地名で名前をつけることは無いようで、何処産の茶葉が分からないのが難点だ。今日買った紅茶は国内の山地の物なので、もしかしたら同じものかもしれない。遠くから取り寄せたりはしていないだろう。

（紅茶からも酵母は出来るんだよね？）

紅茶を始めた頃にそんなことを見ていたことを思い出した。果物と一緒に後で試してみる事にしよう。そんなことを考えながらお茶を飲んでいるとフランが帰ってきた。

「おかえり」

「ん、ただいま」

「……どうかした？」

フランが何か考えているようだったので気になって聞いてみることに

にした。紅茶を用意しながらフランに何があったか訊ねる。

「私宛にギルドに依頼が来ていたのよ。断っても良いけど、どうしようかと思つて。国外に出るからハジメの意見も聞いておかないと」
「なんで？」

「私が暫く居なくなるからよ。森から街まで遠いし転移もまだ出来ないでしょ？ 帰ってくるまでここに居てもいいけど、どうする？」
「直ぐ出るの？」

「明日には出るかしら。転移で近くまでは行くけど、他にも同じ依頼が黒のランクのチームに出ているらしいから、その人たちと一緒に行動することになると思う。直ぐには戻ってこられないかも」

「一緒に行つてみてもいいかな？ だめなら転移だけでも覚えて家に居るよ」

「来るのはかまわないけど、あまりすることも無いわよ。私は戦力としてじゃなくて風と水の使い手として呼ばれたんだから。一緒に行動して依頼が済んだら解散。特に面白いことも無いわ」

「風と水の使えてだから呼ばれたの？ 他には居なかったのかな？」

「私は転移が出来るからね。少し離れた国だから到着が早いほうが良いらしいわ」

「なるほどね。帰りはゆつくり帰ったりしない？」

「いいけど、どうして？」

「旅つてしたこと無いから。夜営とかやってみたい」

「……その辺で一人ですればいいじゃない」

「そうだけど……」

なんとなくその辺ですると、旅をするのでは色々と違う気がするのだ。

「まあいいけどね。それなら他のチームと分かれてからになるかな。ついでに何か依頼を受けてみるのもいいかもね」

「ギルドに登録しないかね」

「そうね。これから向かいましょいうか。依頼の返事と一緒に同行することを伝えておきましょう」

ギルドに向かつてさつさと登録をして昼を何処かで摂ろうという事になった。ハジメは少し前からの魔術の弟子で、同じ属性をもつフランに上級魔術や複合魔術を学んでいる、という設定らしい。弟子が居るからと言って返事を待ってもらっているようだ。

フランの家からギルドまでは直ぐ近くで、体感で二、三分ほどだった。

冒険者ギルドの中はテーブルが並び、ちらほらと冒険者らしい人が座っていた。フランは真直ぐカウンターに向かい、そこにいた女性に話しかけた。

第7話<冒険者ギルド>(前書き)

とりあえず1週間連続で……

出来るだけ更新速度を落とさないようにしたいですが、書き溜めて投稿していないため毎日の更新は難しいと思います。

のんびりと御付き合いただければ幸いです。

第7話<冒険者ギルド>

冒険者ギルドに着いたフランはカウンターに居る女性に話しかけた。

「いらつしゃい。さっきの依頼の話かしら？」

「ええ、受けることにしたわ。これがさっき言っていた弟子のハジメ。残して行こうと思ってたけど、連れて行くことにしたから。」

「大丈夫よね？」

「お二人でチームを組むなら大丈夫でしょう。そちらの方は冒険者？」

「これからその登録をしようと思って」

二人の視線がハジメに集まる。カウンターの女性は見た目二十代後半で、肩の辺りで切り揃えられたブラウンの髪に、青い瞳をしていた。その目はハジメを見定めるような色をしていた。

「はじめまして、ハジメと言います。フランに魔術を教わっています」

「はじめまして。私は此処のギルドマスターをしているテリアです。よろしく」

「よろしくお願いします。テリアさん」

「それなら、早速登録しましょうか。必要な書類を書いてもらえる？」

渡されたのは名前、年齢、属性適性、職業、能力などを書くスペースが取られた書類だった。ハジメは必要事項を書いてテリアさんに渡した。

名前・・・ハジメ

年齢・・・21

属性・・・無属性、風属性、水属性

職業・・・魔導師

能力・・・

「これで大丈夫ですか？」

「んー……ええ、大丈夫よ。属性はフランと同じなのね。すごいわね、三つの属性を使えるひとは多くないのよ」

「ええ」

テリアの呟いた言葉にフランが反応した。使う属性については話していなかったようだ。フランは財布から小金貨一枚を出すとカウンターに置いた。

「ちょっと待っててね」

小金貨と書類を持ってテリアさんはカウンター奥に入ってしまった。暫くして一枚の透明なカードを持って戻ってきた。それをハジメは受け取り、説明を受ける。

「このカードは冒険者ギルドのギルドカードよ。さつき書いてもらった内容のほかに登録したギルド拠点や識別用の番号、銀行の残高なんかが見れるようになってる。冒険者ギルドには銀行もあつてお金を預けておくことも出来るわ。別に銀行は使わなくてもいいわ。他の国でお金を下ろしたい場合は冒険者ギルドに預けておくとか何処でも下ろせるから、少しくらいは入れておいたらいいと思うけど」

「そうなんですか」

「ギルドの規則を何度も破るようなら凍結されてしまうから注意してね」

「はい」

カードには名前と年齢と右下にギルドの印だけが表示されていた。

「右端の印のところを持ってカードに魔力を注いでみてくれる？」

フランを見て確認すると、僅かに頷いた。ハジメはカードに魔力を通す。すると名前の他に先ほど記入した内容と拠点、文字と数字が混じった長い文字列と九〇エルドと言う文字列が浮かび上がってきた。右端の印から浮き上がった文字を避けるようにして白い模様が広がっていく。模様の拡大が止まるとテリアさんから声がかかった。

「もういいわよ。それで貴方の魔力の登録が出来たわ」

魔力を止めると浮かんでいていた文字が消え、それを覆うように模様が広がった。右下のギルドのマークも消えて模様の一部に変わっている。前に見せてもらったフランのカードと同じような、植物をモチーフにした綺麗な模様だった。厳密じゃない場では魔力を込めない状態で呈示するが、ギルドで依頼を受ける時や、都市などに入城する際は魔力を込めて身分を証明するらしい。一年に一度は依頼を受けるか、ギルドで継続手続きをしないとカードの効力はなくなるらしい。

「二人で依頼を受けるようだから、二人ともカードを貸してくれる？」

「ええ」

「どうぞ」

カードと依頼書をカウンターのにある石版の様な所において、なにやら操作している。カードが薄く発光し収まると石版からカードと依頼書を渡された。

「これで二人で依頼を受けたことになるから。依頼内容の詳細は伏せられているから依頼主から直接聞いて頂戴。伏せられているけどギルドで審査はしているから、違法な行為ではないはずよ」

「わかったわ。ありがとう」

「ありがとうございます」

「気をつけてね」

二人でテリアさんにお礼を言い、ギルドを後にする。食事のついでに旅の支度もしておこうと云う事になり、カバンや財布、ナイフや薬などの必要なものを一通り買い揃えた。食料は今日買った物と、向こうの街で揃える事にして家に戻ることになった。

「そのナイフでよかったの？」

「うん。これをメインで使うわけじゃないし、メインにするにしても使いやすい武器が無かったからね。ナイフは無かったら困ると思うからこれでいいよ」

「そう。それじゃ、今日中に転移魔法を覚えてもらいましょうか。何時も私が一緒に転移するのは大変だから。行きは連れてってあげるけど、帰りは暫く旅して転移で帰って来るようになるからね」

「うーん。了解です」

よろしくお願いします、と頭を下げる。今日からは三つの魔導具を使い分ける練習も加わるため、中級魔術で軽く練習して上級魔術と複合魔術に取り掛かった。

広場の一角に氷結槍の雨が突き刺さる。
現在ハジメは各属性の上位魔術を終え、複合魔術を実践していた。
氷結系の魔法は水属性と風属性の複合魔術だった。転移魔術を習得する前に無、水、風属性で可能な複合魔法の練習を行うことが必要だった。

『氷結槍！』

転移魔術や飛行系魔術は他の複合魔術と違い自分自身にその効果が掛かる為、習得前に魔力を合成する感覚に慣れる事が必要だとフンは言う。

『氷結槍！！』

複合魔術には他にも系統が存在する。火属性と風属性の爆炎系や水属性と風属性の複合治愈系、移動系にも無属性と風属性の複合や地属性と風属性の複合魔術。空と時の時空系は過去に二人しか使用者が居ない。

「フリーズ」

「そろそろいいかしらね」

地面に突き刺さる氷が庭の一角を埋め尽くし、地面が見えなくなつた頃、ようやくフランからお許しが出た。まだ涼しくなるには早い季節だが森の中にある家の庭周辺には冷気がこもっていた。ハジメが吐く息は白く体は震えていた。

「さ、さむい……」

「どうかしら。属性を合成する感覚は分かった？」

「わ、わかった。だい、だいじょうぶ」

「そう。それなら次は複合上位に行ってみましょうか」

「た、タイム！」

「……なに？」

「さ、寒いからちよつとタイム！」

「そう、それならついでに火属性の魔術でも使つて見ましょう。中級くらいなら簡単に出来るでしょう？ あの水の山を火属性魔術で消してみなさい」

「……」

結局休憩無しで火属性中級魔法の連発が始まった。

氷山が無くなった頃今度は蒸し暑い熱気がこもり、風魔法で吹き飛ばす。その後、複合上位魔術の練習として、風属性と無属性の合成での飛行魔法の練習に入った。重さを扱うのは無属性らしく、風と無属性で減重、地と無属性で加重の重力系を扱うことが出来る。無属性単体でも重力系は可能だが、重力系に移動などの付加効果を追加する場合、他属性との合成が必要になる。

『身体強化』
『フライ
飛翔』

墜落したときの為に身体強化を掛けて飛行魔術を発動する。高度をあまり上げない様にしながら家の周囲を旋回する。人間が空を飛ぶと言う事に改めて感動しながら飛行・旋回・着地を繰り返す。風単体の飛行は飛んでいると言うより風で飛ばされている感じだったが、無属性が加わったことにより自在な飛行が可能になった。

ハジメの習得速度は異常な早さだった。普通上位の複合魔法の魔法陣形成は簡単なものではない。中級でさえ時間を掛けて、魔法陣が綺麗になるまで指導を受けながら練習するものだ。ハジメは複合の最初こそ戸惑っていたが、慣れてくると初めての魔術でも一度で綺

麗な魔法陣形成をやつてのけた。魔力量が多く、連続して大量に発動できることも早熟の一つの要因だった。

結局、夕食前までに単独での転移を習得し、その日の訓練は終了した。

次の日の朝。

ハジメはフランと共に大陸北部にあるサンデダン王国の王都にやってきていた。サンデダンの気温はこの季節でもサルクノーレより涼しく、過ごしやすい。水の季節には雪が降り、北部の山は雪に閉ざされる。

この国は東に接する大国、カメリア皇国と友好的で、奴隷制などの廃止や他種族の人権を認めている。しかし、反対の西側や南側は人間主義の国が多数存在し、サンデダン国内でも奴隷などにする目的で人間狩りや、亜人狩りが行われていてその被害は収まっていない。

ハジメ達は街の店を幾つか回った後、冒険者ギルドに顔を出した。ギルド内部はマリヴェーラの街のギルドより広く、二階には食事が摂れる休憩所が設置されていた。依頼を受けて来たことをギルドマスターに報告すると、同行するチームの到着まで、二階で休憩を取る事になった。

「依頼が終わったらデルフェノに行きましょうか。此処から西に行った所に海に面した国があるから、そこまで歩いていきましょう。結構大きな国で他種族も居るから私も過ごしやすいと思うし。途中少しかだけ別の国を通ることになるけど街に寄らなければいいわ」

「異種族に厳しい街？」

「ええ。でもデルフェノに入れば友好的な人も多いから。魚でも買って帰りましょう」

デルフェノの街はメインコルヌ王国内の港町である。過去にフランも行ったことがあり、海の幸も豊富なようだ。サンデダンの国境からは歩いて十日くらいかかるらしく、旅はそれで十分だろうと言われた。途中の国は飛行魔法でさっさと通過することにし、実質八日程でデルフェノに着くだろう。道すがら王都にも寄り、買い物もしようということになった。

暫くして、ギルド員に応接室まで案内された。

第7話＜冒険者ギルド＞（後書き）

ありがとうございます。

次回は初めての依頼になります。

次の更新は明日（12/9）か土曜日（12/10）になると思います。

第8話<依頼>

ギルド員に案内された応接室には、この街のギルドマスターと冒険者らしい男女が五人に、依頼主らしい男性が集まっていた。依頼主は身なりの良い格好をしており、貴族かそれなりの生活をしている者ようだった。

メンバーがそろったところでギルドマスターが話を切り出した。

「全員揃った様なので改めて。俺がサンデダングルドマスターのグロンドだ。これから話す内容は外部に洩らすことが無いように。依頼終了後も同様だ。いいかな？」

黒以上の冒険者のチームに指名で依頼が来る場合、その多くが機密事項を多数含む場合がある。それは国家の機密であったり、個人、他のギルドなど様々だ。もちろん依頼する際にギルドマスター以上またはギルド本部の審査は必要となる。他国の権利を侵すような行為は認められていない。

ここに居る皆、それを分かっているため黙って頷いた。

「ん。それでは依頼の内容はこちらのリシンさんからお話いただく」
グロンドに目線で促されたりリシンはゆっくりと話し始めた。

「このたびは依頼を受けて頂いてありがとうございます。私はとある高貴なお方に御仕えしております。先日お嬢様が街の様子を見ると仰られ、護衛数名を連れてお忍びで街にお出掛けになりました。お嬢様はしばしば街の様子を視るとお出掛けになるのでその日も何時もの様に御帰りになるのをお待ちしておりました。暫くして、護衛の遺体が街の外れで見つかったとの報告がありました。我々は全

力を持って搜索を行いました。出てくるのは他にも数名の少女や女性が行方不明になったと言う情報だけでした」

そして、行方不明になった女性の中に無属性だが属性を持っていたものがいた。その人間から家族が念話で連絡を受け、現状が把握できたと言う。女性は現在サンデダンの北西に接するジエイムの国のペイダンの街に向かっていると言うことだった。一緒に捕まっている女性の中に依頼人の探している女性がいたという事でギルドに今回の件を依頼。

女性たちは奴隷の首輪を填められていて、今回の依頼内容は女性たちの解放及び奴隷商人の確保。敵国であり、兵士を動かすことは出来ないと言うことで、他国でも自由が利く冒険者による速やかな奪還を希望しているらしい。女性は重要な人物であり万一にも危害が加えられてはいけない。また、奴隷にされたなどと言われることが無いよう秘密の厳守が求められる。

「私は移動の補助と、万一そのお嬢様に危害が加えられた場合の保険と言うことですね」

「はい。首輪により行動の制限がされており、目的がばれた場合人質にされる可能性もあります。その場合最悪……。それと今朝、女性の中に一人酷い怪我をしている者が居ると報告がありました。こちらの女性の治療もお願いしたい」

「分かりました」

「我々は奴隷商人の確保と護衛の討伐及び女性たちの安全の確保、ですね。護衛の騎士が殺されていたところを見ると、かなり腕の立つものが関わっている可能性も有りそうですね。」

「その通りです」

「分かりました。直ぐにでも出発した方が良さそうですね。馬の用意はお願いできますか？」

「既に馬を用意させております。換えの馬も国境付近の町で用意さ

せておりますので、そこで乗り換えてください」

同行するチームと簡単に自己紹介を済ませると、直ぐに出発することになった。ギルドから出る際気になったことをフランに聞く。

「……フラン」

「なに？」

「馬なんか乗ったこと無いんだけど」

「……そうだったわね。私の後ろに乗るか、飛行魔術で向かいましょうか。……ハジメの魔力なら大丈夫だろうけど目立たないよう馬に乗った方がいいわね。私の後ろで減重の魔術を使って？まっていなさい」

「……お願いします」

街の外には五頭の馬と馬車が用意してあった。ハジメは馬車があることに安心したが馬車と馬には交代で乗ることとなる。ハジメは馬の乗れないため馬車に軽量化の魔術をかけて乗ることになり、三人が馬に、依頼人を含めた五人が馬車に乗り込んだ。準備が整うと早速サンデダンの街を出発する。

ハジメは御者台にフランと乗り、馬車の操縦を学んでいる。

「馬に乗れなくても馬車なら直ぐ操縦できるようになるんじゃない？ 馬の練習は……馬を買うか何処かで借りるしかないから今は無理ね。移動に困らないし、世話も面倒だし私は持つてないから」

「でも、馬は乗れるようになっていた方がいいよね？」

「そうね。依頼なんかで移動手段が馬しかないときもあるかもしれないから。乗馬の練習はそのうち機会を見てやりましょうか」

「ありがと」

暫く走ったところで一旦、馬を休憩させることにして街道を少し外

れた水場に馬をとめる。街道の近くを小川が流れており休憩所としては最適な場所らしい。

フランと携帯食で昼食を摂っていると、二人に声がかかった。

「ちよつといいかな？」

声のかかった方を見ると同行チームのリーダーの男と、メンバーの女性が立っていた。男性は茶色の髪に薄茶色の瞳をした三十過ぎ程の外見で、引き締まった体格をしている。確か、 balan さんと言った。

「なんでしょうか？」

「いや、少し話しを試みてね。黒のランクはあまり多く無く、中でもソロで活動している黒は其方のフランシエシカさんだけなのでね」

「そうですか」

「それが今回、二人で依頼に参加している。珍しいと思って、君と話をしてみたかったんだ」

「僕……ですか？」

「ああ。聞いてもいいかな？」

「そんなに面白いことはありませんが……」

それから休憩を終えるまで、ハジメはフランとの関係について、異世界の内容などを伏せて、話した。一緒に居た女性は魔導師らしく、フランとなにやら話をしていた。

その日の内に国境の町で馬を乗り換え、次の街へ駆ける。夜間も交代で馬を駆りながら奴隷商の馬車を追う。奴隷商がペイダンの街に

到着する前に目標を確保することが最良だ。街に入られて貴族にでも買われてしまえば、問題が更に深刻になってしまう。腕の立つものも居る可能性が有るため、一度は本格的に休憩を取る必要があるため、朝方街道から外れてフランが風の結界を張り休憩を入れた。国境を越えて馬車で凡そ二日の距離を一日遅れで急行したため、ペイダンの街に到着したのは夕刻過ぎ。城門が閉じる少し前に、奴隷商隊を追うような形で街に入ることになった。チームから二人念話を繋げた者が奴隷商の監視を行い、残りのメンバーで奪還作戦の立案を行うことになった。

「街に入られたのは悔やまれるが、夕刻過ぎと言うのは好都合だったな。夜間の内に速やかに対象を奪還。奴隷の首輪を解放し朝方にも街を立つべきだな」

「そうね。出立は二手に分かれたほうが良いかしら。これ以上人数が増えて共に行動していると目立つからね」

「ああ。街の外で合流するようにした方が良い。進入方法だが、フランシエシカさんには建物周囲と建物に結界を張ってもらいたい。我々が街を出るまで騒ぎが起きないほうが良いからな」

「それは考えていたわ。進入の際は建物周囲に防音と逃走防止用の結界と……念話の妨害もした方がいいかしら？ 進入中に念話が仕えなくなるのが難点だけだ」

「そうしてくれ。まず対象が捕らわれている所まで行き、そこにも進入禁止の結界をしてくれ」

黒のランクの二人が代表して話を進める。第一目標の対象確保を最優先に行い、護衛の排除と奴隷商人の確保を行う。最悪商人の殺害も、第一目標を確保した場合許可されている。奴隷商と第一目標の二人は確保した後、直ぐにサンデダン王都のギルドに引き渡すことに決め、残りの対象は護衛をしながら王都へ向かうこととなった。フランも二人を抱えての転移は二度程が限界で最低限の輸送しか出

来ない。その後は大きな魔術をあまり行使できなくなるので、結界の一部はハジメが行うことが決定した。

「それじゃあ明け方近くの暗い内に開始しましょう。制圧後は三、四名で馬車と馬の確保して近くで待機。後は開城時間まで警戒することになります」

街からの脱出はチームごとに別れて行うことに決定し、フランとハジメのチームが依頼人と共に少し多めに護衛を引き受ける。

街内、室内では大規模な戦闘は出来ないため、従来の予定通りバランスのチームがメインで行うことになる。バランスさんは室内や洞窟内での戦闘も幾度か経験したことがあるらしく、問題は無いそうだ。

ハジメは魔術の訓練で鳥などの動物を殺しているが、人間との戦闘は初めての経験になる。一度戦闘と言うより殺戮^{テロ}を経験して死んでいるため、自身の死への恐怖心は体験済みだ。いざとなれば自分を生かすために、相手を殺すことも今のこの世界では可能だろうと思えている。

この世界では殺さなければ殺される状況は沢山存在するし、遭遇する。魔獣に盗賊、今は活発ではないが戦争などもあると言う。

「大丈夫？」

考え事をしていると、心配そうな顔がハジメの視界にうつる。ハジメが深刻な顔をしていたのだろう。

「貴方は今回の戦闘に参加する必要は無いわ。殺された事は有つても、人間を殺したことは無いのでしょうか？ 珍しい体験だけだね」

そういつて微かに笑うと、今度は顔を引き締めて向き合う。

「人を殺すことになれる必要は無い。けれど、自分が生きるためには躊躇ってはいけないわ。間違った力を振るうことは罪だけだね」

「……うん。大丈夫だよ……ありがとう」

自分の考えていることを正確に理解して声をかけてくれるフランに、ハジメの心は少しだけ落ち着いていた。

作戦開始まで後半刻ほど。ハジメの、異世界での、命を奪うための戦闘が始まるうとしていた。

第8話＜依頼＞（後書き）

ありがとうございます

次回最初の戦闘なので僕が色々と不安です。戦闘描写は控えめになるかも？

最初がこの依頼で大丈夫かな……

第9話＜襲撃＞（前書き）

投稿が遅くなりました。ごめんなさい

第9話<襲撃>

街に朝陽が登る前に作戦は始まった。

ハジメが全員に身体強化などの補助魔法をかけ、フランが屋敷の周囲に結界を張った。 balanさんのチームの魔導師、ケイトさんが見張りの人間の意識を刈り取る。屋敷の外では騒ぎを起こさないよう、極力殺さないように決めていた。倒れて音が出ないよう魔法で補助しながら接近する。

「それでは balanさんたちは商人の確保を、私たちは対象の確保を行います」

「よろしく。行くぞ」

balanさんたちチームは二手に分かれて対象の確保と屋敷の占拠に向かう。ハジメ達は一方のチームと対象の確保に向かう。屋敷は二階建てで建物内の気配を探ると、地下から多数の気配が感じられた。

「地下から多数の気配がするわ。入り口を探しましょう」
「了解」

一階の搜索を行うと地下に続く扉を見つけることが出来た。そこは接客室のような部屋から奥に入ったところにあった。地下へ続く階段があり、依頼人を含めたハジメ達四人は地下への階段を下りていった。

女性たちは屋敷の地下の一室に閉じ込められていた。扉ごと鍵を破壊し中へと入る。

「リシンさん。確認してください」

「確認しました。お嬢様もおられます。怪我も御座いません」

「王都で捕らえられたほかの女性は居ますか？」

「私たちと一緒に王都から連れられた方たちは此方の六人です。他の方達は私たちが来たときには此処に居られました」

「そうですね。この屋敷を制圧した後あなた方を解放します。私たちは貴方たちを連れてサンデダンに向かいます。……他の方々はどうしましょうか」

中には十名ほどの女性が居て、第一保護対象である女性も居ることが確認できた。怪我人の治療を行いながら今後の方針について話し合う。

「希望者は連れて帰っていただければと……。この程度の人数ならば仕事が必要な方は紹介できるかと思っています」

「それは……。いいでしょう。貴方は暫く此処に居てください。私たちは balan 達の援護に向かいます」

ここに居る女性たちの解放や、仕事の斡旋をしたところでこの国での……周辺国での奴隷の問題は解決しない。生活が苦しく、奴隷となるものもいるこの国で偽善と思われる行為だが、依頼主が提案する以上……実際不可能ではないため、無碍には出来ない。

ハジメは部屋の中に結界を張って不可侵の領域を創り上げると屋敷の搜索に向かう。

「ハジメ。離れないで着いてきてね」

屋敷内には護衛などは殆ど居なかった。その護衛たちも balan 達に完全に制圧されていた。遭遇した者は口を封じ、寝ていたものたちは眠りの魔術を更にかけられ拘束した。奴隷商は寝ているところを起こされ、軽く尋問してから睡眠の魔術を施し、暫く目が覚めない

ようにしたようだ。

「戻りましょう。リシンさんが遮念結界の外から王都に連絡しているから連絡が取れ次第、奴隷商人と彼女を連れて行くわ」

捕らえた者たちに浮遊の魔術をかけ、 balan 達と共に警戒しながら地下に戻る。一度結界を解いて中に入り再びかけ直す。

「リシンさん。王都に連絡は出来ましたか？」

「はい。直ぐにでも転移をお願いしたいのですが」

「分かりました。ギルドに引き渡した後戻ってきますので暫くお待ちください」

リシンにそう言うつとハジメのほうを振り向く。

「ハジメ。私の結界と同じものを張って頂戴。魔導具無しに遠くから結界を維持するのは大変だから」

「ん……これでいいかな？」

「ええ。……効果しか教えていないのに簡単にやつちゃうのね。魔術の構造が読めるのかしら？」

「んー、魔術を習い始めた頃は良く分からなかったけど、最近はなんとなく解るようになってきたかも。頭もすっきりしてきたし此処サルトクリゼに慣れて来たのかも？」

魔術を使っている内に段々と体の感覚が馴染んで来た気がするのだ。この世界に来てから六番目の感覚器官　直感が六番目なら七番目になるが　となった魔力器官も当たり前のように感じる事が出来てきた。それに伴い他の五感も澄んできた気がする。

視覚が無くなり聴覚が発達するという事は聞いたことがあるが、感覚が増えたことにより他の互換も発達したようだ。体も地球にい

た頃とは比べ物にならない程軽くなってきた。

第六の感覚が完全に体に馴染んだ時どうなるか楽しみであり……怖かった。

「そう。もう私なんか超えてるかもね。馬車の確保をする場合は結界内を確認してから逃走防止用の結界だけ解けばいいわ」

少し寂しそうに呟くと、フランは二人を連れて王都に轉移した。

フランが戻るまでに、それぞれ行動を起こすことになっていた。バランはチームの内四人に馬と馬車の用意を命じ、ハジメと共に屋敷周囲の警戒にあたる。

現在は屋敷内の結界を残し、屋敷周囲の逃走禁止の結界を解いているため、遮音結界内の通行が出来てしまう。そろそろ日があけるということで人が起き出して来るのに注意しなければならない。

外を警戒していると自分に近づく気配を感じた。その気配はかなりの希薄で、結界の魔力の揺らぎで何とか知ることが出来た。かなりの実力者らしい。

「連絡が無いから来てみれば……取り込み中だったか」

「……どちらさまでしょう？」

「しがない傭兵だ。今はそこ屋敷の商人の護衛に雇われていてな……」

（こいつが王都で護衛を殺したやつか？）

王都では護衛の騎士が殺されていた。この屋敷にいた者たちでは騎士を殺害し誘拐することなど出来ない。この男が誘拐に加担し護衛騎士を殺害したのだろう。

ハジメは遮音結界に静かに逃走防止用の結界を加え男の退路を断つ。転移は阻害しないのでフランが戻ってくることも出来るだろう。

「護衛？ 誘拐を行うのも仕事の内なのですか？」

「さあな。何処であろうと敵を斬るだけだ。金を貰って人を殺す。それが傭兵の仕事だろう？」

男は笑顔でそう言うと、唐突にハジメへと斬りかかる。帯剣していた長剣を瞬時に引き抜いて五メルデはある距離を一瞬でつめた。

「……ッ！」

（防護障壁！）

ハジメは咄嗟に魔術を行使し、男の剣を弾いた。続けて風の魔術で障壁前方に爆風を創り出した。

「っと！ ……よく防いだな？」

男は風の発生と共に大きく後方に飛び退き発生した風をやり過ごす。創り出した風は魔術の難度としては下級の物だがハジメの魔力により、その威力は中級魔術ほどの効果を発揮していた。しかし、相手を殺せるほどの威力は出ていない。尤も、暴風で吹き飛んでいれば普通の人間ならば大怪我をしているだろう。

（殺しに来たか……）

ハジメは胸の内で小さく溜め息をつく。人を殺すことに対して躊躇いは有るが黙って殺されるつもりは無い。一度目の死では自分の無力を味わったが、今は自分の身を守るだけの力がある。生きるために殺す。守るために殺す。

「投降してください。貴方に僕は殺せない。貴方は法によって裁かれる」

先ほどの風の障壁を張れば此方が傷を負う事は無いだろう。フランが言うには『ハジメの魔力なら中級程度の障壁を張るよりこっちの方が頑丈でいい』とのことだ。上級の結界を元にフランが編み出したらしい。人間の魔力では何度も出来ない程の魔力を必要とする。

「ほう。俺が何をしたのかな？」

腰に差した大きめのナイフを構えながら、ハジメは僅かに考えた。誘拐に殺人。誘拐については奴隷商人が行い護衛として同行したのだろう。商人が誘拐を自供したらしいのでこの男が同行していたことも調べれば分かるだろう。

雇われたから依頼主を守るために人を殺す。それはこの世界では当たり前のことだ。そこにある善悪は別として。

この男を捕らえることが出来れば商人の証言で裁くことも可能だろう。

「傭兵として雇われ、依頼主の敵を殺す。それが仕事だ」

（だが、この男……）

この男の言い方は人を殺すことに執着しているようだ。これまでも

同じような仕事をしていたのだろう。

「屋敷に結界が張ってあって中は分からないが……仕事でね。殺してあげよう！」

再び笑みを貼り付けた顔で男が斬りかかる。ハジメは男の剣を障壁で受け止め、強化した体で後方に大きく飛び退く。

『風刃連舞！』

魔術の風が男に襲いかかる。膨大な魔力で練り上げられた複数の風の刃は男を鎧ごと切り裂いた。

屋敷周囲の結界を一部解くと馬車と共に balan がやって来た。どうやら結界を張り直した際に結界の外に出ていたらしい。結界内に入ろうとしても入れなかったため、何かあったのかと思ったがどうにも出来なかったと言う。仕方なく警戒しながら馬車の到着を待っていた。

「これは……ハジメ君がやったのか？」

「はい。奴隷商の護衛の男です。おそらく王都で騎士を殺したのもこの男でしょう」

「そうか。おい、屋敷内に運べ。こんな道の真ん中に死体があるのは拙い。二人は血痕を片付けてくれ」

balan はチームの男に死体を運ばせるように指示し、血痕を消させた。辺りは僅かに明るくなってきておりそろそろ人が起き出す頃だ。ハジメは結界を屋敷と裏路地に縮小し、馬車のそばでフランの帰り

を待っていた。

「ただいま……どうしたの？」

ハジメの表情から何かを感じたのか、そう聞いてきた。

（そんなに分かりやすい顔をしていたらどうか……）

若干の苦笑いを浮かべ、フランのいない間の出来事を話して聞かせた。

「そう……怪我はない？」

「うん。フランが教えてくれた障壁を使っただから、怪我してないよ」

「あれを使ったの？ ま、あの障壁なら特別な魔剣でも無い限り突破は無理でしょうね」

「……うん」

フランは優しくハジメの頭をなでた。身長はハジメの方が十ルーデ十センチ 程高いが手を伸ばしてハジメの頭を撫で続ける。

「慣れる必要はないわ。さっきも言ったけど間違わなければいい」
「……」

「私はハジメが生きていてよかったと思ってる」

「……ありがとう」

「それじゃあ、そろそろ出発しましょうか。この依頼が終わったら少しサンデダン王都で買い物でもしましょう」

「うん」

ポンポンと頭を軽く叩いて屋敷に戻っていく。見た目的には同年代だが人生経験はフランのほうが豊富だ。年齢的に祖父 フランに

言ったら殺されそうだが のような年月を生きてきたフラン。

フランに優しく頭を撫でられて、ハジメは少し心が軽くなっていた。

第9話＜襲撃＞（後書き）

ありがとうございました。
戦闘描写少ないですね……

第10話<サンデダン王都>

三日後、サンデダン王都にハジメ達二人の姿があった。

依頼はその後何事も無く、当初の予定通り依頼主の身元など明確にされないまま終了した。依頼主のリシンと共にギルドへ戻ると解放された奴隷たちの今後などについて確認した後、報酬を受け取り解散となった。報酬は基本的に黒のランク持ちに対して金貨三百枚

およそ三千万円 だった。通常、これをチーム単位で分配するらしい。

相当重要な人物なようで口止め料も内には含まれている。通常、奴隷一人につき金貨十〜百枚超で値が付くため奴隷として買いなおした方が良いのではとも思うが、一度でも正式に奴隷誓約 契約ではない が結ばれると刻印として消えない傷が残るらしい。

奴隷商にいる間や、身売りなどで将来自身を買い戻すことが出来る場合、奴隷契約が適応される。犯罪者たちは殆どの場合一方的な奴隷誓約が結ばれる。誘拐された者の殆どはこの奴隷誓約を交わされ、生涯残る奴隷としての刻印が刻まれる。基本的に購入する主の意向で選択されるためその区別は明確ではないが。

（国の重要人物の身内で合計六千万……高いのか安いのか）

日本人としては映画などで身代金が億単位で要求されることを考えると安いかもしれないが、此方の世界では日本の金銭感覚は通用しないのだろう。

「ホントに半分も貰っていいの？」

「いいわよ、別に。お金なんて余ってるし、受けなくてもよかったのよ。ハジメもしっかりやっていたわ」

「……ありがとう」

「……そ、それじゃあ買物でもしましょうか。デルフェノまでの食料なんかも買っておかないかね」

先日のことを思い出して少し落ち込んだハジメに若干焦って話題を変えるフラン。ハジメも大分落ち着いたのでフランに気を使わせてしまったことに焦った。

「そ、そうだね。……もう一度ジエム国内を通るんだよね？」

「ええ。最短距離ならそうなるわ。面倒事があっても困るから飛行魔法で一氣に通過しましょう」

「飛行魔法なら半日もかからない距離なんだっけ？」

「そうね。魔力の関係も有るからそれだけ飛んだらその先で夜営する必要が有るけどね。転移したら旅って感じじゃないし、夜営も旅の醍醐味なんでしょう？」

「馬車での旅もよかったけど、お尻が痛くなるのはつらかったな。夜営も殆ど無かった様な物だし」

日本にいたときも幼少の頃に家族とキャンプに行った記憶があるが、良い思いではない。祖父に引き取られてからは稽古の思い出ばかりのような気がする。

「今回は馬車もテントなんかも用意しないから毛布だけよ。結界があるから外敵に気を使う必要は無いけど夜営をするなら寝てても気配を探れるようになっておいたほうがいいわね」

起こしても起きないときもあるし気を付けなさい、とハジメは注意された。

「気を付けます……」

「次はどうしようか……ハジメは剣術は出来るのよね？」

「うん。子供の頃からやってたからそこそこね。爺さんには最後まで勝てなかったけど」

「それじゃあ武器買いましようか。今ナイフしか持って無いでしょ」

「うーん……此処には刀つてあるのかな？」

「刀？ サーベルみたいな物？」

「うん。片刃の剣で反りがあつて波紋があるのが特徴かな」

「波紋ねえ……見たことはない、かな」

「やっぱり？ ……片手剣でも持つておいたほうがいいかな」

「両手剣は使えないの？」

「日本刀は……つて打刀だけど、それは一応両手剣になるのかな？
それを使つてたから使えないことは無いと思う」

「一応？」

「偶に二刀で使つてたから」

武器屋に着くとその外観に驚いた。

「……ここが武器屋？」

「そうみたいね。ギルドマスターに聞いたから来てみたんだけど……」

町の隅にひっそりと建っていた武器屋　だという建物　は外からだと怪しい店にしか見えない装いをしていた。人が入ることを拒んでいるような入り口には店の名前【月風華】と書かれていた。

「月風華……風の季節に咲く白い花の名前ね。この国の周辺には生えていないけどもう少し南にいけば生息しているわ……なんでこの国で月風華なんだろ？」

「フランの家の周りには生えてる？」

「ええ、あの辺りの地域から北にかけてが一番の生息地かな。風の

季節になれば実際に見られるわよ。白くて綺麗な花よ」

建物の中に入ると外観から受ける印象と同じような雰囲気のお店だった。壁には武器のほかに魔導具らしい杖なども置いてある。店の奥にはフードを被った店主と思われる男性が座っていて、ハジメ達をみていた。

「……いらつしゃい」

「見てもいいかしら？」

「どうぞ」

店主にことわって店の中の武器を見る。

「バスタードはこの辺りね。その、打刀？　っていうのに似た物はある？」

「ん、……この中じゃサーベルがやっぱり一番近いのかな。形は」

「その、波紋がないといけないの？」

「あ、いや。使い慣れた物がいいからね。形は似てるけど、つと重さも違うね」

「そっか。その打刀つても見てみたいけどそれはまたね。あとはこの辺りの両刃の剣がいいんじゃない？」

フランが手にしたのは刃渡り一八センチ（80cm）ほどの幅広の片手剣だった。刀身は微かに赤く、神秘的な雰囲気を醸し出していた。

「刀身が紅い？　何でできてるの？」

「これは火の属性付与がされているわね。だから微かに赤いのよ。魔力を通すと火属性適性が無くても恩恵が受けられる……魔導具の一種ね。魔導剣と言った方がいいかな」

フランが魔力を通すと刀身が鮮やかに紅く染まった。炎を纏っている訳ではないが熱を感じる。

「これは……燃えているの？ 熱くなってるね」

「刀身が熱くなってる訳じゃないの。刀身が燃えると脆くなるですよ？ 触れた物が高熱に熱せられる。魔力を解くと……触ってみて？」

「え、熱そう何だけど……」

「大丈夫よ、ほら」

フランが刃の部分にそつと触れるがどうやら熱くは無いようだ。どうやら刀身に触れた物に高熱を付与するものらしい。

「こんなのは一般的なものね。火属性は刀剣との相性がいいから比較的良くあるものよ。でも結局魔力を使うから魔力の多い人しか使わないけど。高熱を付与する物だから普通の人間だと数分くらいしか維持できないんじゃないかしら」

「斬る瞬間だけ使えばいいんじゃない？」

「魔術が使える人間なら可能でしょうけど、自分で魔術を組んだほうが効率がいいわ。魔術が使えない人間は普通そこまで魔力操作できないし、ちよつとの時間しか練習できない技術をそこまで鍛えるには相当時間が必要でしょうね」

「そういうもんか……」

「……ハジメはその魔力があるから何度でも練習できるけど、魔力が低い人は一日にそう何度も練習できないのよ？」

「……そうでした」

確かにハジメは魔術を殆ど二日でかなり扱えるようになったが、それは膨大な魔力が有ってこそその荒業だ。一日で全ての魔力が回復す

るわけではないのだから、上級魔術などは数回使えば簡単に魔力は底を尽き、魔力量にもよるが全快まで回復するには数日かかる。保有魔力量が多いほうが回復速度も速く、消費した状態ではその速度も遅くなる。魔術師は魔力が底を尽くまで魔術を行使することは殆ど無いのはこのためだ。魔力が無い状態の魔術師は身を守るすべがなくなってしまう。

「ハジメなら今言った、斬る瞬間に魔力を込めるってのも出来るんじゃない？ 普通の魔術師は剣は使わないからね。剣を使うハジメは少し練習すれば出来るようになるんじゃないかな？」

「それなら最初から付与しておけばいいんじゃないかな……」

「ええ」

「……」

結局練習するメリットはあまり無いようだ。

「……？」

ふと、気になってハジメは店の中に飾られている一本の剣を手にとった。

「これは……？」

見た目は普通のロングソードに見えるが込められた魔力が気になった。

「店主さん、これは幾らですか？」

「……分かるのかい？」

「んーなんとなく？」

「それはかなり昔の物だよ。一人の能力者が創り上げたと言われて

いるが、どうやら持ち手を選ぶようですね。似た波長の魔力が能力が無いと使えないらしい」

そつだ。どこかで感じたことがある。

「使い方は？」

「魔力を込めるだけだ」

ハジメは言われたとおり魔力を込めると、剣は淡い光を放ち指輪に変形した。

「……これは？」

「……驚いた。どういうこと？」

「どうやら、お客さんは前の所有者に近い魔力をもっているようだね？ 実際に持ち手が現れたのは初めてだが、指輪になるとは……」

「これは幾らで譲っていただけますか？」

「……これは持ち手を選ぶから……もう八十年もこの店に置いてあったんだよ。……金貨十枚でいいよ」

「あの古そうなロングソードにしては高くないかしら？」

「いいよ。これを頂きます」

フランが少し値段に文句があるようだが、これはロングソードではない。なんとなくなだが、この刀剣はこの世界の中でも特殊な物のように感じる。

「ありがとうございました」

「……まいど」

剣？ を購入したあとはいよいよ旅の支度だ。この剣の使用方法是街を出てからでいいだろう。

「よかったの？ その剣で？」

「うん。なんとなく、役に立ちそうな気がしたんだ」

「まあ、いいけど。……金貨十枚もするとはね」

「使う人間によつてはもつと価値があるかもしれない。僕にとつては……どうだろう？」

「そんなことも分からずに買ったのね……」

「う……。でもなんとなく僕の力に近い気がしたんだ。それに……」

「それに？」

「こういう持ち手を選ぶ武器ってカッコいいよね」

「……」

少しフランの視線が痛いのが気にしない。

（やっぱり武器といえば持ち手を選ぶ物だよね）

激しく勘違い甚だしいが、普通の剣より特殊な剣の方が愛着が湧くというものだ。武器屋を紹介してくれたギルドマスターに感謝を捧げる。

「……あ！」

「な、なに？」

大変重要なことを聞いておくのを忘れていたのだ。もちろん剣の使いか

「お店の名前の由来を聞き忘れてた……」

「……どうでもいいわよ」

第10話<サンデダン王都>（後書き）

ありがとうございます

持ち手を選ぶ剣は有りがちですね？喋ったりはしません

閑話＜ハジメとの旅路＞（前書き）

フランシェシカ視点

閑話＜ハジメとの旅路＞

「それじゃあ出発しましょうか。国境の町まで二日くらい歩けば着くからそこでもう一度食料を補充することにしましょう」

そういつて私は歩き出し、城門を出る。ハジメは私の隣を歩いている。

「この前とは違う町だよね？」

「そうね。少し方向が違うからね。国境の町と言っても国境までは距離があるから語弊があるかも知れないけど」

これから向かうのはメインコルヌ王国。サンデダン王国の西方に位置する、海に面した交易が豊かな国だ。サンデダンと同じく獣人や竜人、私たちエルフ 私は半血種^{ハイフェル}だけど も暮らすことが出来る国だ。二つの国の間や北には亜人種差別の国もあるのでサルクノーレ王国よりは過ごし難いが海路もあるため様々な人が暮らしている。

とりあえず今回はデルフェノの街へ向かう予定だ。一度行けばハジメにお魚も買ってきてもらえるので丁度良いかな。

「その今回行く港町はどんなところ？」

「そうね……港があるわね」

「……それで？」

「魚が美味しい街ね」

「……」

「……なに？」

何かおかしかっただろうか？ お魚が美味しい港町であってるわ

よね……。

「う、海は綺麗なのかな？ 僕の住んでたところはあまり綺麗じゃなかったから」

「さあ。依頼で何度か行つた他には偶に魚を買いに行くくらいだからしない」

「……」

基本的に私は買い物と依頼以外で家を離れることは殆ど無い。学院に通っていた頃は偶にお姉ちゃ……姉に連れられて色んな所を見て回ったから転移先には困らないけど。

デルフェノの街の事も実はあまり知らないのだ。お魚は好きなので偶に買いに来ることはあるが、それもサルクノーレの近くに別の港町があるから其方に行くことが多い。

ハジメの目が冷たい！

「え、えーと。街は結構綺麗だったわね……たぶん^{ホッ}。それにお魚も美味しいわ。海は……何処もあまり変わらないんじゃない？」

「そっか。あまり知らないんだね」

「う……」

仕方ないわよね。あまり人間は好きではないし人と関わることも最低限しかしていない……。おね……姉に学院に入れられなかったら何処かで一人で死んでいたかもしれないし。

「それじゃあ、一緒に見て回ろうか。産業排水なんかも無さそうだし綺麗だろうな、海」

「そっね」

考えてみればこうやってゆっくり旅するのも久しぶりだ。依頼で家を離れるときも移動に時間を掛けることもしないし、魔術の研究や魔導具造ったりする以外何もしていない気がする。完全に引きこもっているわ。

ハジメが来てからまだ余り時間がたつてないけどすごく時間が経つのが早い。偶に姉が家に遊びに来るときに似ている。姉は結構前に教授になっただけ、忙しいみたいであまりあえないけど。

「今日は此処で夜営をしましょうか」

「了解」

そういつて軍でするみたいに足を慣らしてポーズをするハジメ。王国では胸に手を当てるがハジメは額に手を当ている。子供みたく可愛いかも知れない。

「とりあえず乾いた木の枝なんかを捜してくれろ？ まだ暖かいけど夜は少し冷えるし、結界があるから実際に魔物は来ないけど、魔物除けにもなるわ」

「わかった。どのくらい拾ってくればいいかな？」

「出来るだけお願い。沢山有るようなら何回か行つてね。少ないのはしょうがないから諦めましょう」

とりあえず夕食にしましょう。ハジメは結構食べるから食材は少し多めに買ってきた。旅ではあまり荷物が増えるのは良くないけど、はじめから干し肉や携帯食っていうのは可愛そうだ。

どうせ後半は携帯食か食べられる魔物を食べることになるんだから。

「ただいま。結構落ちてたからもう一度行ってくるよ」
「お願いね」

調理の準備をして鍋に水を張って野菜を洗っていたら、ハジメが枝を拾って戻ってきた。とりあえず魔導具で火をおこして新しく張った水を沸かす。あまり凝った物は此処では作れないから簡単な物になってしまいうけど、前に美味しいといってくれたシチューにしよう。

ハジメと食事を終え、食器を片付けてお湯を沸かす。ハジメは紅茶が好きなようで茶葉を持ち歩いてた。依頼の前に買った物に加えて、今朝の市でも幾つか購入していた。私は紅茶の良し悪しはあまり分からないのでハジメにお任せだ。

「紅茶の違いが分かるの？」

「少しはね。飲んだことが無いのは分からないけど。だからこの世界の紅茶を色々飲んでみたいな」

「家は基本的にマリヴェーラの市でしか買っていないからハジメに任せろわ」

「フランはいろんな国に行けるんだよね？」

「そうね。私たちが居られる国の大きな街には大体行ったことはあるかな。エルフの居辛い所は全然行けないけど」

「それじゃあ、また何処かに一緒に行かない？ 今日の様子だと唯行っただけみたいだし」

「……」

「あ、そんなに長居しちゃだめ……かな？」

「……別にいいわよ」

少し寂しい気持ちになった。こんなに人と一緒に居ることが苦痛じゃなかったのは初めてだった。ハジメは何時か私の前から居なく

なってしまうのだろうか。そう考えると胸が痛んだ気がした。

ハジメが眠っている。

結界の中で火を囲いながら眠ることになったのだ。少し離れているハジメの寝顔を眺める。本人はあまり自覚が無いようだが、結構整った顔をしている。寝顔は子供のようでなんだか可愛らしいが。エルフの男性とも良い勝負をするのではないだろうか。もしかしたら女性とも……

「ふふ……」

自分の可笑しな思考に笑いがこぼれてしまう。ハジメに聞かれたらいきなり笑い出した私は可笑しな人に見えてしまったかも知れない。幸い、しっかりと眠っているようだった。

ハジメの世界では今の時間はまだまだ眠るような時間ではないらしいが、この世界に慣れてきたのか、それともすることが無いからなのか此方のリズムに近づいている。

最も朝早く起きるのはあまり得意ではないみたいだけど。

ハジメを保護して今日までのことを思い出しながら、私の意識はゆっくりと沈んでいった。

閑話＜ハジメとの旅路＞（後書き）

ありがとうございました。

本文は大体四千字、閑話は半分くらい目安で書いてます。

というのも最初40000字を4000だと思って必死に纏めてたんですが四話位で気付いてしまいました。変えるのもあれなんで暫くはこのくらいで続けます。

あと、webで横書きなので頭を一字空けてませんでした但至少つ直します。今回からは最初から空けていきますが。

今年も今日で最後ですね。

よいお年を

閑話＜少女の事情＞（前書き）

明けましておめでとございます。
今年もよろしく。

新ヒロイン（？）登場です。もうヒロインは増えない……かな？
新年早々暗い話で申し訳ない……
新年から暗い話なので暗いのはごめんだという方はお戻りを……

閑話＜少女の事情＞

（くらい……）

一台の馬車に一人の少女が乗っている。少女の様子から、乗せられているが正しいかもしれない。

手には錠付きの枷が付けられており、鎖で檻に繋がれている。檻といっても馬車の半分ほどに鉄格子が付けられた簡単な物だが、それでも十歳手前ほどの少女にとってどうしようもない障害だった。

少女の足にも同様に枷が付けられていた。両足に付けられた枷は短めの鎖でつながれ、歩くことは出来ても走ることが出来ないようになっている。

そして、首には奴隷を象徴する首輪が付けられていた。

少女は親の顔を殆ど覚えていなかった。小さいときに両親は亡くなったらしく、家の近所にあった個人経営の孤児院に預けられた。

孤児院での生活はとりあえず不自由は無かった。あまり食事は与えられなかったが、それでも飢えてしまうほどではない。他の子供たちも何人も居て賑やかな所だった。皆幼い子供たちばかりで十を超える歳の子供は殆どいない。

孤児院では常に引き取り手を捜しているらしく、ある程度大きくなった者は何処かで引き取られているらしい。残っている子供は十五、六の子供が数人と、残りは年端かも行かない子供たちだった。

孤児院はメインコルヌ王国の南東部にある比較的小さな街にあった。獣人やエルフも僅かながら暮らしており国柄から、差別なども

あまり見られない街だった。それでも国を超えた隣街では亜人の差別が行われており、少なからずその影響も見られるが。

孤児院で暮らす獣人の少女もそんな街で幼少の頃から過ごしていた。孤児院は子供ばかりのため、自分と違う特徴を持つ者は少なからず避けられたり、虐めの対象になったりしている。

少女は今年の風の季節、空月に十歳になったばかりであった。

この大陸では四季が四つに分けられている。ヴァンデセラ風の季節、フォティエナ火の季節、テルトラ地の季節、オズイオ水の季節。風の季節が三巡月、他が二巡月からなり、一巡月が四十日。各月には風月、空月、無月、火月、光月、地月、時月、水月、影月、隔月（九年に一度数日の調整日）の名前が付いている。

少女の髪は本来、透き通るような白銀で、獣人の特徴である耳や尾も同様に綺麗な色をしていた。最も、普段からあまり汚れを落とせていないようで、今ではくすんだ色をしていたが。

少女の瞳は髪とは対照的に金色の瞳をしていた。この世界では獣人にとって金色の瞳は珍しく、特定の少数種族のみが有しているだけだった。

この世界の獣人は様々な種族が存在している。猫の様な特徴を持つ猫人や、狼の特徴を持つ狼人。また、そこから細かく分けられる。件の少女は中でも魔力、身体能力が共に高い天孤種族であった。

天孤は銀狼と共に、この世界の二つの月の女神の使いとされており、獣化するとその天孤の姿をとる。月の象徴である銀の毛並みに金色の瞳が特徴で、獣人の中でも魔力が一番高く、身体能力も五本に入るほどだ。

獣人は人間に比べて魔力が高いため、魔力量で大体の寿命が決まるこの世界では、三百年以上生きる者が殆どだが、天孤種族はその魔力量から最低でも千年は生きると言われている。その分幼少期と青年期が他の獣人より遥に長く、幼少の頃は特に殆ど親と離れるこ

とは少ないのだが。

「これが今回の子供か？」

「ええ、この子供は獣人でも珍しい天孤でして、魔力、身体能力共に高く、見た目もこの通り美しいなりをしていますので……」

「……なるほど。これなら高く売れるだろう」

「ありがとうございます」

（うれ、る……？）

少女は目の前で行われている会話を理解できなかった。その言葉自体の意味は理解できるのだが、頭が働かなかった。朝早くに、他の子供が起き出す前に起こされ、手に枷をはめられた。そのまま孤児院の裏口へ連れて行かれ、そこで目の前の男が立っていた。

「九番、彼がこれから暫くお前を預かってくれる。しっかりということを聞きなさい」

「……」

男は少女を一瞥するがその目は何処か、汚い物を見るような色が浮かんでいた。

「それではこれが、これの代金だ」

「二十枚ですか？ もう少しありませんか？」

「それでも亜人の中では高い方だぞ？ ……此処までだな」

そういつて男は金貨を追加で何枚か孤児院の経営者である男に渡していた。

売られた。

そう理解したのは首輪を付けられてからだった。男はジエーム王国ペイダンの奴隷商の人間で、これからペイダンの街に向かい、そこで貴族に売られることが決まっているらしい。その貴族は獣人の美しい少女の奴隷を探していて、ものによっては金貨百枚ほど出すと言っていると言われた。

あの街の孤児院は定期的に子供を奴隷商に売り、そのお金で経営しているということも男から教えられた。そして、自分の名前……九番の意味も。

孤児院の子供には全て番号が付けられている。売れたあとの欠番は新しい子供で補充され、番号で管理される。文字を教えられていないためどのような字か分からないが、九番目でノーノと呼ばれていたらしい。言葉の加護はあるが、ノーノが名前として呼ばれていたため、数字として理解することは出来なかった。

（……な、まえ。……わたしのなまえは？）

少女は自分のことが分からなくなり、涙を流した。声を出して鳴けば孤児院のときに殴られていたので静かに、涙を流した。

馬車の片隅で縮こまり、足を抱えて静かに泣いていた。泣きつかれ、馬車に揺られ、硬い馬車の床の上で丸まって意識を手放した。

「……だ……ッ！」

街を発ってから数日経ったその日、いつもと違う出来事が起こった。馬車は止まり、外が騒がしくなっていた。

「……ん……？」

数日泣き続けた少女は既に泣くことを止めていた。街で同じ馬車に載せられていた人間の奴隷は途中の街で殆どが降ろされ、残りは少女を含めて数名のみとなっていた。

「囲まれた！　なんとかしろ！」

護衛に就いていた男たちへ、奴隷商の男が叫ぶ声が聞こえる。何かに襲われているらしい。激しく金属の打ち合う音が聞こえてきた。

（とうぞく……）

その時、数本の矢が馬車の中まで飛び込んできた。少女はお腹から熱い痛みを覚え目をやると、腹部に一本の矢が刺さっていた。傷口から流れる血は少ないため、それほど内蔵まで傷ついてはいないだろうが、少女にとっては今までにないほどの耐えられない痛みだった。

「あ、あ……い、たい……」

痛みには耐えられず蹲り、終には横たわりお腹を抱えるように身を縮める。昨日までとは違う痛みに涙が流れる。

その頃には外の音も殆ど止んでいた。

「ぐあああああああー！」

奴隷商の男の悲鳴が周囲に響く。それを最後に金属音も完全に止み、話し声が聞こえてきた。

「馬車を調べろ、金目の物を運び出せ！」

盗賊らしい男の声が聞こえる。次第に足音が近くなり、馬車の荷台の幕が上がった。

「奴隷商か。男と……死掛けの亜人の餓鬼か。金目の物を探せ！餓鬼は連れて行く！」

そう言つと、男はいきなり奴隷の男たちを切り捨てた。目の前で起こった惨劇に、少女は腹部の痛みを忘れて固まってしまう。

「や、……やああー！」

微かな力を振り絞り、叫ぶ。怪我をして、こんな状況だが、死にたくない。

（たす、けて……！）

「檻か……面倒だな……ッ！ どうした！」

急に周囲が騒がしくなった。外から男たちの叫び声が聞こえてきた。馬車に乗り込んでいた男たちも慌てた様子で飛び出していく。

やがて、周囲は静まり返り、男女の会話する声が少女に届いていた。

閑話＜少女の事情＞（後書き）

ありがとうございました。

今回は今夜か明日にでも更新できるかと思います。

次何が起こるか わかりですね……；

この話を後にしようと思いましたが、閑話続きできりがいいので此方を先にしました。

第11話<月の狐の少女>

国境の街での宿泊を終えて買い物済ませたハジメ達は、これから国境を越えるべく街から離れたところから無と風の複合魔術の飛行魔術を使い飛び立っていた。

メインコル又王都までの簡単な配達依頼もハジメはギルドで受けている。

「この辺りから、ジエイムね。半日ほど飛べばメインコル又の国境があるから、そこまで街を避けながら飛びましよう。二つほど在った……はずだから」

「面倒ごとは避けるのが一番だからね」

フランがいるため、ジエイム国内ではあまり行動しないほうが良い。エルフというだけで目を付けられて、面倒なことになるらしい。

「昔、護衛の依頼でメインコル又からサンデダンへ同行したことがあったんだけど、その時エルフだって事で、何度も狙われたわ。奴隷にして売れたかったんでしょね」

「フランは綺麗だしね」

「ッ……！」

「あれ、エルフはみんな綺麗なんだっけ？」

「……」

なぜだろう。空気が重くなった。

「ぐあああああああー！」

「ッ……！」

遠くから男の叫び声が聞こえてきた。既にジエーム国内のため面倒ごとは避けたいのだが、何かに襲われているのか、何かしらの危険な状態なのだろう。

聴きようによっては断末魔の声のようにも思えるが、旅路を一人で往くのも珍しいので他にも人間がいるだろう。

二人は飛翔速度を上げて人間の気配がする方向へと近づいていく。

「あれは……盗賊かしら。馬車が襲われたようね」

「……そうみたいだね。けど既に商隊の人間は死んでるかな」

上空から馬車の様子を見るが、御者台の人間は弓矢で貫かれて絶命しているようだった。他に、装備の良さそうな者や、身なりの整った者が斬られて転がっている。馬車に近づく男が金目の物を集めるように叫んでいる。恐らくあれがこの盗賊の頭なのだろう。

「既にみんな死んでるから助けることは出来なかったようね。盗賊だから放置するのも問題だけど……この場で私たちが急いで手を下す必要はないわね。この国の人間が討伐するのが一番なんだけど……」

「……そうだね。人数も多いし飛び込めば無闇に死人を出してしまうし、フランも危険にさらすことになるね」

正直、盗賊討伐の気は進まない。商隊の人間が生きている間なら助けに入ることも考えたが、既に助けることが出来ない今となっては、無闇に人を殺すことに躊躇いを感じる。盗賊を放置すれば同じような被害も出るというのが気になるが……

「や、……やあああ——！」

「ッ——！」

その時、馬車の方から子供の悲鳴が聞こえた。気配を探ってみれば、弱つてはいるが何人かの気配を感じた。その内幾つかは今この瞬間に消えてしまったが。

フランとハジメは空中から一斉に魔術を放つ。助けられる命があるので躊躇うことはしない。到着したとき助けに入っていれば消えた命の幾つかは助けられたかもしれない。後悔の念を感じながら再び魔術を放つ。

『風刃連舞！』

『氷結槍！』

二人で凡そ半分の人数の命を一度に刈り取る。飛び道具を持つている者や、魔術師と思われるものから優先的に殺していく。馬車に近づきながら更に魔術を発動する。馬車の中から帰り血を浴びた男が出てきたが、先ほどの頭の男だったため、問答無用で魔術をぶつける。

残ったのは沢山の馬と、商隊のものらしい馬車。それから二十を超える男達の遺体だけだった。

「馬車を調べましょう。まだ生きている人がいるわ」

「うん。……一人だけみたいだね」

「……そうね。直ぐに助けに入ればよかったわ」

フランが苦い顔をして頷く。ハジメも同じような顔をしているのだろう。二人は急いで馬車に駆け寄った。

「う、これは……」

「奴隷商人ね……奴隷の男たちは死んでいるわね」

「女の子は……獣人だね。お腹に矢が刺さってる……」

馬車の中には獣人の女の子だけが生き残っていた。腹部に矢を受けて出血している。その子供だけ檻の中に入れられていた。意識はまだあるようで、ハジメと目が合った。

男たちは檻の外に繋がれていて、剣で切り捨てられている。この人たちが助けられなかった命だろう。

「うう……た、すけて……」

残った力を振り絞ってハジメに助けを求めてくる。顔には涙の後がはつきりと見て取れる。手を伸ばしてきているが、檻に入れられていて手が届かない。

「とりあえず、女の子を治療しないと……まだ子供だからこのままじゃ危ないよ。……あれ？ フラン？」

振り返るとフランがいなかった。早く治療しないとこの子も危険だ。

「ハジメ！」

馬車の外から声がかかった。振り返るとフランが金属製の何かを投げてよこしてきた。

「これは……鍵か」

どうやら檻の鍵を奴隷商の遺体から取ってきたらしい。治療するにしても檻の中に入らなければ矢尻も抜けないし治癒魔法もかけられない。檻と女の子を確認した時点で鍵を探しに行っていたみたいだ。

「ハジメ、私が矢を抜くから治癒魔法をかけてあげて。此処から移動することも考えたら私の魔力じゃ助けられないかもしれない。風と水の複合治癒を教えたでしょ。結構体力も奪われているからどんな魔力をつぎ込んでね」
「……わかった」

実際にこれだけの傷を治すのは初めてだ。複合治癒の練習では簡単な傷を治す位しか練習していない。一人の命が懸かっているので慎重にならなければいけない。

「大丈夫。程度は違っても教えた魔術で癒せるはずよ」

「ん……」

「矢を抜くわよ……少し我慢してね」

フランが女の子に話しかけながら矢を持つ手に力を込める。

「……んッ」

「う、うううう……」

歯を食いしばって痛みに耐える女の子に、ハジメの胸が痛む。

「抜けたわ。ハジメ」

『彼の者に水と風の命の光を……最大限の癒しを与よ』
マキシマム・ヒーリング

トリガーの魔術名だけでは不安のため、少しだけ詠唱を追加する。腹部を含めて、可能な限り全ての怪我と傷が癒えるようお願いながら魔術名を告げる。

少女の傷はゆっくりと塞がっていく。これまでにないほど魔力を消耗しているのが分かる。といってもこれまで殆ど感じられなかつ

たものが少しだけ増えた程度だったが。魔力量の少ない人間では風と水のこの複合魔術は難しいだろう。フランもこの魔術で治療すると魔力を殆ど使ってしまうためあまり使ったことが無いと言っていた。

前回の依頼も、この魔術を頼ったものらしい。

「ん……」

痛みが消えて気が抜けたのか、少女は目を瞑って意識を失った。脈を測るがとりあえず大丈夫のようだ。

「ふう……」

「お疲れ。大丈夫？」

「うん……もう大丈夫かな？」

「そうね、女の子はこれで大丈夫だと思うわ。後は此处から離れないと」

「そうだね。血のにおいがあると、魔物も近づいてくるだろうし」

「あとは……盗賊は手配があればギルドに所持品を持っていくと褒賞が出ることもあるけど、今回は見送った方がいいわね」

「遺体はどうしよう？」

「魔物に食われないよう埋めるのが一番だけど、土の属性はないからね。街道に放置するのはあまり良くないから道を外れたとこにまとめて置きましょう」

遺体は街道を外れた森の中にまとめておく事になった。馬や金品は放置しておいても良いが、今回は奴隷の首輪の鍵を探すついでに簡単に回収しておくことにした。少女がこれからどうするにせよ、お金が無いと子供が生きていくには辛いだろう。

盗賊が纏めていた革袋からお金だけを抜き取り、他は放置することになった。盗賊になった様で心苦しいが。

馬は放置すると魔獣に襲われる可能性があるので、連れて行くのが一番だが今回は鞍を外して放つことにした。

「とりあえず此处を離れましょう。一気にジエームを抜けて、行ける所まで行きましょう」

「そうだね。この国に残っていてもフランもこの子も危険だ」

「ハジメはその子を抱えて飛べる？ 距離を考えて私だこの国を抜けられなくなるかも」

「大丈夫。背負っていくよ」

フランに一度女の子を抱いてもらい、ハジメはしゃがんで背中に乗せる。女の子はすごく軽かった。

「……軽いね」

「ええ……」

再び飛翔し、この場を離れる。

フランの魔力が底を尽かないうちにジエームを抜けることが出来た。これからは徒歩での移動なので魔力を回復させる余裕はあるため、少しだけ無理をして先に進んだ。

「今日はこの辺りで休みましょう。結界はお願いね」

フランはかなり魔力を消費しているらしく、少し疲れた顔をしている。少女の呼吸は安定しているが未だに目を覚まさない。

「仕方ないでしょうね。結構な傷だったから子供には辛いわ。体力

を消耗したでしょうね」

「この子は奴隷だったんだよね？」

「ええ、首輪が着いてたからね。でも檻に入れられていたのが気になるわね」

「この子が獣人だから？」

「その可能性は有るわ。あとは女の子だから……とか」
「そっか……」

ハジメは隣に横になっている少女の髪をゆっくりと撫でる。髪は痛んでいるのか汚れているのか分からないが、女の子の髪としては酷い状態だった。

「髪を洗ってあげられないかな？」

「その子が起きてからの方が良いわ」

「そうだね」

体も服も汚れているからお風呂に入れてあげたいが暫く町はない。女の子だからフランに入れてもらうことになるが、汚れているのは可愛そうだ。

「その子は恐らく天孤種族の獣人ね」

「天孤？……狐？」

「ええ、たぶんだけど。月を象徴する銀色の髪。銀の髪の獣人は珍しいのよ。魔力も身体能力も高いし、寿命も長い。……奴隷としては人気があるでしょうね」

苦い顔をしながら言葉を溢す。

「方角としてはジエムに向かっていたわね。奴隷商の屋敷は押さえたけど、あれからまだ五日ほどしか経ってないから、もしかする

とあそこの奴隷商の仲間だったのかも」

「……」

この子も何処かで攫われて来たのだろうか。改めてあの奴隷商に怒りが湧く。

生活が苦しくて身売りをする人や、犯罪者は仕方ないかもしれないが、無理やり攫った人を奴隷にするのは許せない。詳しい事情を聞いてみないと分からないが体にあった痣から察すると、あまり良い扱いは受けていなかっただろう。

「……ん」

ようやく少女が目覚めたようだ。

第12話<名前と家族>（前書き）

三が日は毎日更新……予定。たぶんきつと

第12話<名前と家族>

「……ん」

獣人の少女が身動きをしながら目を覚ました。まだ体が重いよう
で起き上がることはしなかったが、軽く体を伸ばして目を擦る。

「おはよう、えーと大丈夫？」

「……？」

あまり目覚めは良くないようだ。目を擦りながらハジメの顔を見
上げてくる。

「……あ！ うう……」

覚醒したのか、飛び上がろうとするが、力が入らなかったように
倒れる。ハジメは頭を打ち付けないようにそっと抱きとめた。

「大丈夫？ もう少しそのまま横になっていたほうが良いよ」

「……（コクッ）」

ハジメの言葉に素直に頷いた。

「事情を聞きたいわね……。貴方の名前は？」

そこで隣に座っているフランにも気付いたようで、フランにも目
を向ける。

「なまえ……ない。九番……て、よばれてた」

ハジメとフランは視線を交わす。どうやら結構深い事情があるらしい。

「今まで何処で暮らしていたの？」

「……まち？」

「何処の？」

「知らない。こじいんってところにいて……それ、で……う、うう」

女の子は泣き出してしまった。何か辛いことを思い出したのだろう。

（それにしても、番号で子供を呼ぶ孤児院なんてあるのだろうか。親がそんな名前をつけるとは思えない）

「お母さんは居ないの？ 貴方の種族はあまり人が居るところに出てこないはずだけど」

ハジメが頭を撫でながら慰めていると、少し落ち着いたようでもフランが再び質問を始める。事情が分からないとこれからの事が考えられないので、辛いかもしれないが質問を続ける。

「おかあさん？ ……いない。それで、こじいんに……いた」

「その名前は孤児院で付けられたの？」

「……（コクッ）」

「どうして奴隷になったの？ 孤児院に居たならそこで暮らせたでしょう？」

「……」

「……？」

「うら、れた。十歳になって、きぞくがかうんだって」

「……」
「……」

孤児院の人間に売られたらしい。与えられた名前から考えると、子供は商品だったのだろうか。

その後も詳しく聞いていくと、色々なことが分かった。

馬車はどうやらこの前の奴隷商のところへ向かっていたらしい。同じ街の奴隷商はあそこしかなかったから間違いないだろう。孤児院の経営者に金貨二十枚と少しで奴隷として売られ、ジェイムの貴族に金貨百枚程で売られる予定だったようだ。

少女はまだ十歳で、親に付けられた名前は覚えていないらしく、九年程孤児院で暮らしていた。食事もなくに与えられなかったように、体は痩せていて、言葉も拙い。獣人ということで子供たちの内に溶け込めていなかったため、会話をすることも少なかったようだ。

「番号じゃなくて、新しい名前があったほうが良いわね」

「そうだね」

「なまえ？」

「うん。そのままが良い？」

「……（フルフル）」

今の名前はどうか嫌ならしい。確かに名前だと思っていたのが商品の番号だったというのは辛いだろう。この少女に似合う可愛い名前を考えなくては。

「どうしようか？」

「ハジメが考えてあげれば？ 懐いているみたいだし」

言われて少女を見てみると、服の裾をつかんで顔を見上げてきて

いる。

「うーん……ネネって言うのはどうかな？　この前フランに教えてもらった月風華ネネリアの花からとってみただけど」

「ねねりあの花？」

「ネネリアって言うのは昔のお姫様の名前で、月風華の別名で呼ばれてる名前らしいよ。白くて綺麗な花らしいから、銀色の髪に丁度いいんじゃないかな？　月風華にも月って言葉がはいっているし、銀は月の象徴だからね。だからお姫様の名前から貰って『ネネ』。……センスないかな？」

自信満々に言ってみたが少し心配になってフランに尋ねる。

「いいんじゃない？　その子が気に入れば、だけど」

「どうかな？」

「……ネネ」

小さく呟いて黙ってしまった。発音がノーノに近かったから拙かっただろうか。この世界での名前の付け方が分からないから、知っている知識　教えてもらったばかりだが　で考えてしまった。

「だめかな？」

「……（フルフル）」

「ネネでいい？」

「……（コクコク）」

何とかお許しが出たようだ。まだ子供も居ないのに名前をつける事になってしまった。

「そつえば、ネネ。体で痛いところは無い？」

「あっ！」

怪我していたことに気付いたらしく、服をめくってお腹を確認するネネ。ペタペタと触って不思議そうに確かめている。

「どう？ 何処かいたいところ無い？」

「けががない！」

「うん。痛いところ無い？」

「……ない？」

怪我が無いのが不思議だったのか何故か疑問形になっていた。小さく首を傾げながら不思議そうに言った。

「ハジメが治したのよ……ってネネの名前は決まったけど、私たちの名前を言っていないわね」

「はじめ？」

「うん。僕はハジメ。ハジメ・シキだよ」

「私はフランシエシカよ。フランシエシカ・ラザラス。フランでいいわ」

「はじめ……ふらん……」

「そうだよ。ネネ」

ハジメとフランの顔を確認しながら、二人の名前を呼ぶ。小さく何度も呟いている。

自己紹介も終わったので、ネネの今後について決めなければいけない。

《フラン》

《なに？》

ネネに確認する前にフランの意見を念話で聞いておく。

《ネネはこれからどうなるかな?》

《そうね……普通は親がいれば一番なんだけど、亡くなっているらしいし……》

《そうだよね……》

《施設に預けるのも、この子の経験からしたら良くないわね》

《だね……フラン……》

《……いいわよ。幸いハジメに懐いてるし、その子が希望するなら家で一緒に暮らしても良いわ。私も……》

《フラン?》

それ以来何故かフランは黙り込んでしまった。念話も切られたのでこれ以上話すつもりは無いのだろう。

「ネネはこれからどうしたい?」

「……?」

「故郷が分かるならそこで暮らすのもいいし、何処か行きたいところがあれば連れて行ってあげる」

「……」

そこまで言うとは塞ぎ込んでしまった。これからのことを思い出したのだろう。また何処かに置いていかれると思ったのだろうか。

子供が一人で生きていくにはこの世界は厳しすぎる。

「……ネネが良いなら、僕たちと暮らすことも出来るけど、何か希望はあるかな? ……人を信じることは出来ないかもしれないけど

……」

「……」

「……」

（急いで出すべき結論ではないが、出来るだけ希望を叶えてあげたい。僕自身、居候の身なのがフランに申し訳ないが……）

この少女の幸せはなんだろうか……。僕たちが……僕がこの少女に何をしてあげられるだろうか。

「……たい」

「……？」

「いつしよに……いたい」

「僕たちと？」

「う、ん……はじめと、ふらんといつしよにいたい……」

「そっか……」

優しく頭を撫でると、ネネは泣き出してしまった。ハジメのロ―ブに縋って声を抑えて泣いている。

そっと抱きしめて頭を撫で続ける。やがて声を上げて泣き始めた。

ネネは疲れたようで、泣き寝入りしてしまった。夕食を食べていないのが心配だが、ハジメの膝の上で眠ってしまったので起こすのも忍びない。

今日はとりあえず携帯食で済ませることになった。

「フラン……ありがとう」

「……どうしたの？」

突然の言葉に少し驚いたような顔をしてフランは首を傾げた。

「世話になつてばかりだから……」

「……」

「この世界に来て、僕にはフランしか居なかった。……まあ、向この世界でも親しい人はあまり居なかったけど……」

「……そう」

突然の身の上話に、静かに耳を傾けるフラン。ハジメはゆっくりと話を続ける。

「僕もね、両親は子供の頃に死んじゃったんだ……。事故、という
か災害でね。妹も居ただけど……僕だけが生き残ったんだ」

「……」

「それから、祖父の家で暮らすことになった。祖父は厳しい人で、
塞いでる僕に剣術を叩き込んでくれたんだ……。正直勘弁して欲しか
ったけどね」

苦笑いを浮かべて、当時のことを思い出す。

まだ七歳程だったハジメは、一人で暮らしていた祖父に引き取ら
れた。祖母の家は剣術の道場をしていて、多くは無いが門下生もい
た。今では道場はその門下生の人に任せているが、皆祖父を慕って
いた。

子供の頃から毎日剣術の稽古を続けて、少しずつ家族が亡くなっ
た悲しみも克服していった。

他に肉親は居なくて、親戚も殆ど知らない人だった。

今では両親の事もあまり覚えていない。事故の当時の様子はしつ
かりと覚えているのだが、親の温かさなんてものは全然記憶に残っ
ていない。祖父は居たが、親というものに長い間憧れていた。

「子供に親は必要なんだと思う……。フランは親のことをどう思っ
ているか知らないけど……」

「ッ……！……気付いてたの？」

「……なんとなく、ね」

「……」

「フランはお姉さんの話はするけど、親のことは何も言わなかった。この子の親の話をしてたときも辛そうな顔してたよ」

「……」

「フランが半血種ハーフェルフなのも関係があるんでしょ？」

「……」

「ごめん……」

「……いいわよ」

フランも両親についてはどういふ事情があるのか分からないけど、複雑な思いがあるのだろう。まだ知り合って間もないが、深く入り込みすぎてしまっただろうか。

「この子は……ネネは親の温かさを覚えていない。親代わりだった孤児院の人には裏切られた。……親が全てそうだとは言えないけど、無償の愛情を与えてくれる存在が、たとえ親でなくても子供には必要なんだと、僕は思う」

僕自身がそうだったからね、と小さく呟いた。

「……そうね」

「……ネネには幸せになってもらいたいな」

「……ええ」

膝の上で眠る少女の頭を撫でながら、二人は月に少女の幸せを願った。

第12話<名前と家族>（後書き）

ありがとうございました。

次回は明日の同じ時間……たぶんきつと

第13話<朝の風景>（前書き）

10万PV&1万ユニークだそうです……

沢山のお気に入り登録ありがとうございます。

昨日まで60人程の方に登録いただいて僕としては多くの方に気に入ってもらえたかと思ってたのですが……いきなり何倍もの方に登録していただきました。いろんな方に読んでもらえるのは嬉しいです。

これからものんびり更新になりますが、よろしくお願いします。

第13話<朝の風景>

ハジメの目が覚めたのは、街道から外れた野営地に朝日が射した頃だった。地の季節、地月のこの頃はまだ日も高く、だいたい二刻半を過ぎた時間だ。地球に居た頃はこんな時間に起きる事は無かったのだが、すっかりこの世界の生活に体内時計が調整されていたようだった。

「んー、……ん？」

体に毛布が掛かっており、腕の中に重みを感じる。毛布は一人一枚しか用意していないので昨日はネネに掛けて、ハジメはローブを纏って眠っていた。毛布が掛かっているということはフランが掛けてくれたのだろうか。

「すう……すう……」

腕の中から微かな寝息が聞こえてきた。眠ったときハジメは、横になり体の前でローブを閉じるようにしていたが、今は腕の中に何かが眠っているようだった。

掛けられた毛布を捲ってみると、そこには昨日保護した獣人の少女、ネネがハジメに抱きつくように眠っていた。

腕の中でネネは毛布を体に巻きつけるようにしているので、掛けられた毛布はフランのものだろう。

（寂しかったのかな……）

ネネの寝顔を見てみると、涙の後が付いていた。泣きながら眠ったためか、それとも悲しい夢を見てしまったのか。

フランが眠っている方に目を向けると、既に起きだしていて、火の準備をして朝食の用意を進めていた。ネネは昨夜食事をしていないので、お腹が空いているだろう。調理をしているフランを眺めていると、ハジメと目が合った。

《おはよう。今朝は早いね》

眠っているネネを気遣ってか、声には出さず念話で話しかけてきた。

《おはよう。毛布はフランが掛けてくれたの？》

《ええ、夜中に起きたネネが寒そうにハジメの腕の中にもぐっていたから。服も薄いものしか着ていないしね》

《そっか。潜り込んで来るのに気付かなかったな……》

《ハジメだからね》

(酷い……)

ハジメはどうやら寝ていたら周囲の気配を感じられない……どころか触られても気付かない鈍い感覚の持ち主だと思われるみたいだ。

(その通りみたいけど……)

腕の中でネネが身動きしたが、まだ起きては居ないようだ。起こさないようにゆっくり力を込めて抱きしめる。腕を枕にされているため、起きようにもネネを起こしてしまいそうで躊躇われる。

とりあえずフランが朝食の準備を終えるまではこのまま寝かせておくことにする。腕の中の頭にある大きな耳は、焚き火の木の弾ける音が鳴る度にびくびく動いていた。

街なら朝の鐘が鳴る時間になると、朝ごはんの好い香りが漂っていた。

ハジメの腕の中でネネが大きく身動きする。伸びをするように体を伸ばし、再び縮こまる。目を擦りながら落ちていた目蓋を開く。

「おはよう。良く眠れた？」

「……ん」

ハジメの腕の中でハジメと視線を交わして小さく頷く。のそのそと起き出し、その場で座り込んだ。毛布に包まったまま頭をゆらゆらと揺らしている。

腕を開放されたハジメは立ち上がり、伸びをしたり関節をほぐしたりして硬くなった体を覚醒させる。

「おはようハジメ、ネネ。……ネネはまだ寝てるの？」

ネネの前に回りこみ顔を覗きこむと、目を瞑ったままウトウトしていた。ゆらゆら揺れる頭が可愛らしく、自然と笑みが浮かぶ。どうやら朝は低血圧なようだ。

「顔を洗ったら目が覚めるだろうから、水を用意してあげて」

フランに言われたとおり水魔術で水の塊を空中に作り出す。布を用意してから水の塊から手で掬い顔を洗う。用意した布で顔を拭くと、さっぱりした気持ちになる。

「ネネ、顔を洗おう？」

「……ん、……」

何とか意識はあるようで、素直に顔を洗ってくれる。何度か水を掬って顔を洗うと、そのまま顔を上げてしまった。

ハジメは持っていた布でネネの顔についている水気を布を置くようにして拭いていく。女の子の顔は擦ってはいけないとか聞いたことが、ないような、あるような。

顔を洗うとようやく目が覚めたようで、しっかりと目を開けていた。

「……おはよう、はじめ」

「おはよう。良く眠れた？」

「うん。……ふらん、おはよう」

「おはよう、ネネ。ご飯の用意が出来てるから手伝ってくれる？」

「ごはん？」

「昨日は食べられなかったからお腹空いているでしょ？」

ネネの返事はお腹から聞こえた。

「ごはん……いいの？」

「もちろん。手伝ってくれる？」

「……うん！」

ネネはフランの元へ駆け出していく。ご飯が嬉しいのか、お手伝いが嬉しいのか、纏っていた毛布はそのまま残して行ってしまった。

（片付けるように言わないといけないが……少しずつ教えていけばいいだろう）

ネネが残した毛布を畳みながらそんなことを考えるハジメ。

フランは、ネネに朝食をお碗に注ぐように教えている。二つのお碗にスープが注がれる。

(……そういえばネネの食器も無いな)

次の街に着いたらネネ用の旅用品一式を揃えないといけないだろう。

(体も洗った方がいいだろうな。服も着替えが必要だし、靴も履いていない。毛布に食器にカバンに……)

つらつらと必要そうな物を頭の中に書きとめていく。裸足で街道を歩かせるのは拙いので、どうやって移動するべきか、まで考えがいったとき不意にネネから声がかかる。

「はじめ。ごはんだつて」

「ん？ ああ、今行くよ」

二人の下へ近寄り腰を下ろす。ネネは自分の手の中にある食事に視線が釘付けた。フランにハジメを待つように言われたのか、大きな尻尾を左右に揺らしながら待っている。

「もう食べていいわよ、ネネ」

「……(コクコク)」

フランの許しを得てネネがスープを食べる。スプーンは小さな手で握るように持ち、零さないよう慎重に口に運んでいる。一口食べた途端に顔を綻ばせる様子に、ハジメもつい嬉しくなる。

その様子を見てフランも食事を開始する。

「……あれ？」

何かおかしい、とハジメは感じた。その原因は直ぐに見つかった。いや、見つからなかったのだが。

「フラン、僕のスープは？」

ハジメにスープが用意されていない。手元にはいつもの固いパンがあるだけだった。

「食器が無いから今日は無しね。パンだけで我慢しなさい」

「え……」

「冗談よ。食器が無いから私が食べ終わるまで待つてなさい。ネネは食べるの遅そうだし、私の後にこの食器を使えばいいわ」

「なんだ……ちょっと本気でこのパンだけかと思ってしまった」

「パンだけでもいいけど？」

「有り難く使わせていただきます」

素直にフランに頭を下げる。昨夜は携帯食だけだったので気分的にも空腹なハジメ。パンを少しずつ千切りながら口に運んでいく。一所懸命にスープを口に運んでいたネネが二人の会話に気付いたようで、食事の手が止まっていた。

「……ごめんなさい」

「えっ！？ どうしたの？」

「……ねねがいるから、はじめが……」

ネネの手は微かに震え、俯いてしまった。ハジメがネネの頭に手を置くと、怯えるように身を縮めた。

「そんなこと無いよ。ネネはゆっくり食べて良いからね。今日から僕たちは家族なんだからね」

「かぞく……」

「そうよ。ハジメなんて残り物で十分なんだから、遠慮する必要は無いわ。沢山食べなさい」

「……え？」

「はじめ……」

ネネはフランの言葉に困ったようにハジメを見た。

「……そ、そうだよ。ネネが沢山食べて元気になってくれたら僕も嬉しいな。で、でも太るといけないから程ほどにね？」

「……ハジメ。女の子に太るなんて言うんじゃないわよ」

「あ……」

「ハジメは今日はお腹空いてないみたいだから二人で食べましょうか」

「ええ……」

その後、フランは先ほどまでよりさらにゆっくりと食事を再開し、ハジメが朝食にありつけたのは更に四半刻　凡そ三十分経ってからだった。

朝食を終えた三人は野営地の片づけを終えて出発の準備を始めていた。

そこでやはり問題になったのはネネの服装だった。この時期はまだ暖かいとはいえ、薄手のワンピース　ネネが言うには寝起きに奴隷商に売られたため、そのままの姿でいたらしい。およそ外で活動する服装ではない上に、靴すら履いていないのだ。

フランの話では、昨日飛行魔法で結構な距離進んだらしく今日一日歩けば街がたぶんあるということだ。以前通ったときとは反対方

向であるため確証は無いらしい。

「ねねあるけるよ？」

「だめよ。裸足で外を歩くなんでだめ」

「そうだよ。怪我は治せるといつても女の子なんだから」

「ほら、ハジメ。抱えてあげなさい」

「うん。ネネ、おいで」

ハジメは自身に身体強化をかけてネネを片手で抱える。ネネはハジメの首に手を回し、膝の辺りに回されたハジメの腕に座るように体を預けた。

ネネの十歳という年齢を考慮してもまだ小さい体はハジメにとって、なんら負担にはならなかった。

「ちゃんと？まってるね。今日一日は退屈かもしれないけど、街に着いたら靴を買うから」

「うん。へいき」

子供に同じ体勢で居続ける事をお願いするのは可哀相だが、我慢してもらうしかない。二十一歳でいきなり十の子供が出来て父親になった気分になる。

文句も言わず素直に聞いてくれるネネが健気で可愛い。

「ネネはいい子だね」

（妹や娘がいたらこんな感じなのかな……？）

「えへへ」

頭を撫でると恥ずかしそうに頬を染めて耳がびくびく動く。大き

な尻尾はゆらゆらと揺れる。

（うわー。これは可愛いな……今度耳触らせてくれるかな。……フランの耳も気になるよねー）

既に親ばかも少し入っているが異種族の耳に興味津々のハジメ。以前フランに断られたが、ネネなら触らせてくれる様な気がした。

（フランも今度頼めば触らせてくれないかな……）

「……」

隣を歩いている御方から冷たい視線を感じた気がするが今は気にしない。

第13話<朝の風景>（後書き）

ありがとうございます。

次もほのぼのと面白い物……かな？

全く書き溜めてないので次はこれからです……

明日は朝から予定があるのでどうなるか分かりません。のんびりとお待ちいただければと思います。

第14話<ハジメの趣味？>

街に到着したのは夕刻の鐘まで半刻、という時間だった。

街に着いたハジメ達は早速、ネネの靴を購入した。街で買い物をするにせよ、何時までもハジメが抱えておくわけにはいかない。街も比較的大きく、衣服や旅用品の購入には困らないだろう。

「次は一旦宿を取りましょう。買い物はそれからね」

フ란の提案で宿を取ることに決まり宿屋を探す。靴屋で聞いておいた宿の名前を頼りに街中を歩く。聞いた話では比較的ギルドに近い位置にあるようだった。

「ギルドには寄らなくて良いの？」

「そうね……ネネの身分証明も無いものね」

ネネは前の街で暮らしてはいたが、殆ど孤児院から出たことが無く、終いには奴隷として街を去っていたため個人を証明することが出来ない。

「一応ギルドカードを作ったほうがいいのかな？」

「年齢制限があるから一応確認しないと分からないけど……冒険者ギルドに登録するのよね……」

「あーそうだね……」

特に冒険者として依頼をしない十歳の女の子がギルドに登録するのもおかしい話だ。毎年更新のために一度は依頼をこなさなければいけないため、登録だけ行うというのもだめだ。

「サルクノーレに戻ったら王都で住民登録をしましょうか。後見人には私かなれば良いから」

「住民登録って簡単に出来るんだ？」

「まあね。冒険者は基本的に住民登録してる人は少ないけど、子供は国から出ることも殆ど無いしね……毎年税金を払うことになるけど」

「僕はしてないよね。しなくて良いのかな？」

「冒険者は基本的に国内外で依頼をこなすから普通は意味無いのよね。一応依頼料から税金の換わりに、ギルドが各国を拠点にしている冒険者頭の人頭税みたいな物を国に納めているから」

「へえ……」

「まあ、冒険者が税金なんて気にしてることは無いでしょうね……カードに拠点が分かるようになってるでしょ？」

「ああ、そういえば」

「あれはギルドが税金を払う際に参考にするもののよ。ギルド登録後半年はその拠点で。そこからは毎月、過去半年で滞在した国の中から最も日数が多かった所に支払われる」

「そういう仕組みなのか……ってネネには難しいね」

二人の会話を黙って聞いていたネネは良く分からないという顔をしていた。ハジメとフランに手を引かれて二人の間で交互に顔を見上げていたため、首が疲れそうだ。

「ネネは気にしなくて良いのよ。こういうことは大人に任せておけば」

「……うん」

「お、あれかな……？」

三人の視界に宿屋と思われる建物が入ってきた。路地の先にはギルド特有の雰囲気を持つ大きな建物が遠くに見える。宿屋の看板に

は『月下美人』と書かれていた。

「……ここで間違いない、かな？」

「そのようね。とりあえず入りましょう」

（月下美人か……この世界にもあるんだな。良く知らないけど）

ハジメ達三人は宿の敷居を跨ぎ中に入っていく。カウンターには背の高いかつこいい雰囲気を纏った女性が立っていた。

（月下美人って感じじゃないな……クールなかんじ……だ？）

「いらっしやい」

歓迎の言葉を受けて、ハジメの思考は途中で疑問符を投げて停止した。

美人さんの声がやたらと渋い。まるで男が喋っているかのよう

「あ、え？」

「んーどうしたの？」

「あー……いえ、宿泊したいのですが」

「そう。三名様でよかったかしら？」

「はい……」

「ごめんなさいね。今日は二人部屋が一つしか空いていないのよ」

「あーそうなんですか……どうしよつかフラン。……フラン？」

振り返るとフランとネネが固まっていた。フランは分かるが、ネネも店主らしき女性に違和感を感じたのだろうか。

「フラン？」

「え、あ。……え？」

珍しくフランが狼狽している。あまり人と関わらないからこういうことには慣れていないのだろうか。

「二人部屋しか空いてないんだって。他の宿探すしかないかな？」

「あら、泊まって行かないの？ 二人部屋だけどその子くらいの子なら一緒に寝られる位には広いわよ？」

「そうなんですか？」

「ええ。どうかしら、エルフのお姉さん？」

「は、はい！」

「そ、決まりね。一泊朝夕の食事つきで百二十エルドね」

店主の渋い声にフランが反射的に返事をしてしまい、今日の宿が決まった。

「はあ……」

「フランってああいう人見たことなかった？」

「当たり前よ。……ハジメはなんだか慣れてたみたいだけど？」

「前にアルバイト 仕事してた店の店長があんな感じだったから十七の時から通ってて、大学に入ったら毎日顔を会わせていれば慣れない方がおかしいよ」

「……ハジメもあんな趣味なのかしら？」

「え、いやいやいや。たまたま店長があんな感じだったから慣れただけだよ。……まあ、偶に着せられてたけど」

「……」

フランは複雑な視線をハジメに向ける。過去自分がどんな思考を

していたか自覚していない。

「つ、次はネネの服かな？　まだ時間はあるけど女の子の服は時間を掛けて選ばないとね」

「ふく？」

「うん。今は旅の途中だからあんまり買えないけど、家に帰ったら可愛い服を沢山買ってあげる」

「かわいいふく？」

「そうだよ。ネネは可愛いからどんな服でも似合いそうだね」

「ちがう……ねねはぶすだつて、いったた」

「え？」

「みんな、ねねがぶすだ、つて」

「それは……男の子？」

「うん。ねねの尻尾ひっぱってぶすつて」

（難しいな……男の子は）

「そんなこと無いよ。ネネは可愛いからね。これからはそんな悪い虫が付かないように気を付けないとね」

「むし？」

「そうだよー気をつけないと……つて、痛い痛い」

ハジメがネネに大切なことを教えようとしていた時、後ろから耳を思いつき引っ張られた。

「馬鹿な事言つてないで早く行きましょう。時間なくなるわよ」

「痛、わ、わかったから、放して下さい！　フラン様！」

「ふらん？」

「さ、行きましょう」

「うん……」

「あー、痛い……」

（僕には耳を触らせてくれないのに……）

注意されたことよりやっぱりフ란の耳が気になるハジメだった。

暫くすると衣料品を売っているお店に到着した。お店の中には街でよく見かけるような服が色々と置いてあった。

「うーん。これが普通なんだよね？」

「ん？」

「ネネに似合うもつと可愛い服は無いものかなって」

「あーはいはい」

（んー……これならネネには自分で作ったほうが良いかもね）

ハジメはアルバイト時代にも店長の指導の下、女性向けの衣装を作っていた。

店長はそれなりに有名な人らしく、お店には何時も様々な衣装が並べられていた。店の衣装は殆どが店長のデザインした物だった。弟子の方も何人か居て、デザインのアイデアや試作した衣装に対して意見を交わしたり、指導してもらうこともあった。

店長はお店のことより服を作っている時の方が幸せらしく、商品にしない物まで大量に製作していた。弟子の方やハジメが止めなければ何時までたっても作業しているような人だったのだ。

ハジメの住んでいた賃貸マンションも、店を作る際にそこで住めることを大前提として、一階を店兼作業場、二階が倉庫兼店長の住居。そして三、四階が賃貸マンションだった。

「此处で使っているような布は売ってるのかな？ 出来ればもう少し

し上質な布の方が良いんだけど」

「どうしたの？」

「ネネに服を作ろうかと思って」

「……ハジメが作るの？」

「え？ うん。……あ、フランにも作ってあげるね」

「そういうことじゃないんだけど」

「はじめ、ふく、つくれるの？」

「そうだよー。家に帰ったらネネにぴったりの衣装を作ってあげる」

ネネの頭を撫でながら　少し耳に触れるのは大丈夫なはずだ

ネネに似合うのはどんな物が、と妄想もとい想像する。

そんなハジメにネネは嬉しそうに笑う。ネネも女の子だから可愛い物への憧れくらいあるのだろう。そうと決まれば早速布を

「はいはい。それは家に帰ってからでしょ」

最早、衣装作りは前世での唯一の趣味だったといえるものだった。店長ほどではないがハジメにも衣服の創作意欲は人並み以上に存在する。

「……ハジメ性格変わってない？」

「う……そんなことは無い、はず」

若干店長に似てきているのだろうか、不安になった。

結局、ネネの服は店の中でも上質な物を三着ほどに、ローブや下着などの必要な物を買って今日の買い物は終了になった。残りの買い物は明日の朝にすることにした。

「此処から二日ほどで王都みたいだから、余裕を持って三日位かけて行きましようか。依頼の期日は五日……六日後だっけ？」

「うん。元々十日以内の依頼だったからね」

買い物を終えて、夜の宿にてついでのような依頼の予定を確認する。ネネを保護した際の急行で、一日程予定より早く王都に着きそうだ。

「いらい？」

「ん？ ……ああ。僕とフランは冒険者だからね。依頼をこなしてお金を貰ってるんだよ」

「ぼうけんしゃ……」

「うん。どうかした？」

「……（フルフル）」

「そう？」

「うん」

ネネが何かを考えていたようだが、言いたい事があれば相談してくれるだろう。

それから、少しネネについて考えないといけないこともある。

「それと、王都に行ったら王城に投書をしておきましょう」

「投書？」

「ええ。ネネは直接関わりがあるとはいえ、この国の問題はこの国に解決してもらわないと」

「ん？ ……ああ」

どうやらフランも同じことを考えていたらしい。ネネの居た孤児院……何処の街かはネネが覚えていないため分からないが、人身売

買まがいの事をやっている場所を放置することは出来ない。ネネはまだ気付いていないが、もう少し成長したら自分と同じ境遇の子供が居たことを嘆くはずだ。

「そうだね。僕達で何とかできれば良いけど、元はまともなところだったかもしれないしね」

たとえ人身売買をしても、そのお金は孤児たちに使われているかもしれない。年に数人居なくなっていたらしいので、年に金貨二、三十枚ほど　ネネは特別　で孤児十数人を養うには余り余裕があるとは言えないだろう。

その孤児院の全てを悪と決め付けることは簡単だが、それでも助かっている孤児たちも居るはずだ。こういう問題は国が対処するべきだとハジメとフランは思う。

（本音を言えば、ネネをあんな目に会わせた奴を殺して……ころして？）

そこで、ハジメは思考を止めた。

（殺す？ …… 命の価値観が変わってきたのか）

ハジメがこの世界に來た原因はテロ。目の前の人たちが一人ずつ銃で殺された。

ハジメが最初に殺した人間は人を殺すことが目的のような傭兵。祖父のような強さは感じなかったが、それでも加減が出来る相手ではなかった。

ハジメが殺した盗賊は多くの人間を殺している犯罪者。ネネを助

けるためとはいえ、助けた命の数倍の命を奪った。

（すっかり、この世界の人間になってしまったな……）

人を殺すことに慣れてはいないが、人を殺すことを躊躇う気持ち
が薄れている。そんな自分に寒気がするが、この世界で護りたい物
を護るためにはそれでいいのかもしれない。そんなことを考える自
分にまた少し落ち込んだ。

第14話<ハジメの趣味？>（後書き）

ありがとうございました。

ハジメの趣味が発覚しました。

その内ネネは着せ替え人形になります。

ちよつと4000を超えました……

次はサンデダンで購入した武器について少し。

第15話<ユメ、カタナ、ハジメ>

終わりの始まりは突然だった。

銃で男性が、女性が殺される。子供が、老人が殺される。

留学先で知り合った友人は、ハジメのすぐ目の前で……逝った。

ハジメの最後の瞬間はその後に来てきた。

目が覚めれば、見覚えのある天井が見えた。

ハジメ達が泊まった宿『月下美人』の一室でハジメは目を覚ました。隣のベッドにはネネとフランが眠っている。

（結局、しっかりと眠ってしまったな……）

昨夜は色々と考えてしまったハジメ。フランの話も途中から耳から耳へと素通りしていた気がする。

久しぶりに死んだ状況を思い出したためか、少し嫌な夢を見てしまったようだ。

（……ギルドの修練場を借りて久しぶりに剣を振るか。結局この武器の性能も確かめていないし）

サンデダンで購入した武器　今は指輪だが　の使い方をまだ研究していない。正直、道中では風の魔術さえあれば近接戦闘は必要なかった。

ハジメは通常の魔術にも膨大な魔力を練りこむことで桁の違う攻撃力を発揮できる。打ち消すにも殆ど同等の魔力が必要になるため、

街道に出るような魔獣に近接戦闘を仕掛ける必要性が無かったのだ。

（爺さんが生きていた頃は毎日打ちのめされていたからな……。大学に入ってからには偶に帰る爺さんの家で、稽古するくらいだったが）

ハジメは二人を起こさないよう、静かに部屋を出る。

外は未だ暗く、町の人間が起き出すにも未だ早い。ギルドは基本的に一日中開いているため今の時間でも修練場は開放してくれるだろう。

「護る者が出来た以上、出来ることは全てやっておくべきだよな」

ハジメがギルドに入ると、中は閑散としていた。早朝も早朝なので当然だが。

ギルド職員に修練場の使用を申請すると、問題なく許可が下りた。職員の案内で修練場へ向かう。

「へえ。修練場というか裏庭だな」

街の中のギルドには決まって修練場が設置してある。街は基本的に城門が閉じるため早朝や夜間の鍛錬をしようとすれば広い敷地が必要になる。

冒険者ギルドの修練場は主に剣術・体術・魔術など、一通りの練習が出来る程度の広さを確保してあるものだ。フランが言うには、偶に魔術の使用を禁じた地下の修練場もあるらしいが。

「それじゃあ先ずはこの武器の使い方、だね」

（魔力を通すだけで良いんだよね？）

武器屋でした様に指輪に魔力を通す。指輪は微かに光を放ち指輪のまま姿を変えなかった。

「え……魔力を通すだけじゃないのかな？」

今度は武器屋で持った時の剣を思い出しながら魔力を通した。すると指輪は着いたまま手の中に剣が現れた。

「……指輪は？」

剣を壁に立てかけ指輪を弄る。見た目には変化が見られなかったので、一度外してみることにする。

「つて、外れない!？」

（呪いの指輪かよ!）

良くある呪い武器なんじゃないかと思っただが、特に悪い感じはない。それどころか自分の物だという感覚が微かにあった。

（似たような魔力か能力か……）

武器屋の店主が誰に聞いたのかは知らないが、それが本当ならこの武器を作った人間とハジメは似ているということになる。

（魔力なら……過去の全属性の魔導師か。能力なら……まだ分から無いんだよなあ）

一先ず疑問は置いておき、武器の特性を確認に移る。ハジメは剣を手に取るが微かに違和感を感じた。

「武器の形が微妙に違う？」

武器屋で確認したこの剣は古びた普通のロングソードのようだった。しかし今ハジメの手の中にある剣の形はその時とは僅かだが異なっている。特に剣に施されていたはずの装飾部分が。

「確か、あのときはもっと違う装飾だった気がするなあ……正確には覚えてないんだけど」

（装飾が違うのは、僕の魔力の影響か？ ずいぶんシンプルになるけど……）

それとも、とハジメは考える。剣の装飾がシンプルなのは自分が覚えていなかったからではないか。長さや重さはあの時の感じと同じだが、装飾部分を注意して覚えてはいない。覚えていればその通りの剣が再現されたのではないだろうか、と。

（それなら、少し違った装飾を考えてみるか……？）

「例えば……例えば……桜、とか」

魔力を込めて桜の装飾の入ったロングソードを想像する。すると、手の中の剣の装飾部分が桜の装飾に変わった。桜の花を想像していたので、一輪の桜が刀身に浮かんでいた。

「変わった……。ということはある程度の形状はイメージで変えられるということかな？ ……ということは」

ハジメは地面に正座し、目を瞑って精神を集中する。過去、祖父

との稽古で実際に使用していた刀を思い出す。

（全長一〇八センチ、刃渡り七六センチ、重量七九〇グラム……たぶん）

その後も刀身の反りや形状、刃文に柄や鐔の形状など覚えている限りの特徴を思い出していく。ついでに材質も可能な限り良質な鋼である、と願いながら指輪と剣に魔力を込める。

ハジメが目を開くと両手に持つて掲げていたロングソードは、一振りの打刀に姿を変えていた。

柄を持つて掲げると刃文などが記憶と違うが、紛れも無い打刀日本刀であった。

「おー！ これはいい！ やっぱり武器は持ち手を選ぶ特別製……もとい日本刀だね！」

（これはかなりいい買い物だったかもしれない……金貨十枚、百万円！）

「おっと、銘は四季一にしておこう。……名刀『四季一』ってね」

すっかり浮かれてしまったハジメは、沈んだ気分も稽古のことも忘れ、子供が玩具で遊ぶように武器を弄り続けるのだった。

「ハジメ、何やってるのよ。もう朝ご飯食べちゃったわよ」

「ん？ あれ、フランどうしたの？ ネネも」

「ハジメが遅いから探しに来たのよ。修練場に行ったって宿屋の店主に聞いたから帰ってくるだろうと思ってたけど、何時まで経って

も帰ってこないから先に食事を済ませちゃったわよ？」

「あれ、もうそんな時間なの？」

「そうよ。さつさと買い物を済ませて出発しましょう」

「……ご飯は？」

「無いに決まってるでしょう。もうお金は払ってあったんだから、時間を過ぎたら返金なんて無いからね」

「……おさかなだったよ。はじめ」

「ネネ……」

朝食を抜くことになったハジメにはネネの報告が地味に利いた。

「で、何やってたの？」

「ああ……武器をね……使い方を調べてたんだ」

「そう。どうだったの？」

「いい買い物だったよ。これで近接戦も昔の感覚で出来ると思う」

「よかったわね。まあ、ハジメなら近接戦をするような状況もあまり無いと思うけど」

「……そうなんだよね」

魔獣程度なら魔力耐性もあまり高くないため、接近してくるようなら近接戦になる前にさつさと魔術で殺してしまった方が早い。対人戦も盗賊相手なら接近される前に、纏めて殲滅することになるだろう。

使用するとすれば敵味方密集した場所での戦闘と、魔力耐性の高い、それこそ竜や靈獣相手になるだろう。最も、そのような存在に出会うことは普通の状況では起こり得ないが。

「それが、あの時の武器？ 棒みたいだけど……」

「これは打刀って言って、鞘から引き抜くと……」

「わぁ……きれい」

「へえ、それが日本刀って言っていたハジメの武器ね？」

「うん。……まあかなり弄っちゃったけど」

「ん？」

「なんでもないよ」

黒塗りの鞘から抜き放たれた刀身は鈍く、微かに青みがかった輝きをみせている。刃文は一見不規則な互の目^{ぐのめ}丁子乱^{ちようじみだれ}だが、ハジメが拘りに拘った神秘的な美しさをしていた。この刃文を作るだけで半刻ほど掛かったことはハジメも認識していないだろう。

既に何度も指輪から出し入れして調整に調整を重ね、顕現させる度の変化は殆ど無いほどにハジメの脳裏に焼きついていた。

これで何時でも同じ刀を扱うことが出来ると、ハジメは一人で納得していた。

またこの武器は、指輪に魔力を通せば顕現した武器の回収や、二本までの刀剣の顕現が可能だった。作った人間は双剣を使用する場合なども想定してこの武器を作ったのだろう。

（にしても、どうやって創ったのかな……やっぱり能力の一つなのだろうか）

もし、能力で創られたのであれば、ハジメにも似たことが出来るかもしれない。

（絵に魔力を込めるだけだけど……）

「ハジメ、そろそろ買い物を済ませて王都に向かいましょう？」

「そうだね。その前に朝食を」

「それはまた明日ね」

「うう」

「はじめ……」

そつと握ってくれたネネの手が暖かく、ハジメの心は少し癒されたのだった。

その後、実際にハジメに朝食は与えられず、旅に必要なネネの食器や毛布、カバンなどを買うことになった。

カバンはハジメが一回り大きな物を用意した。毛布などの重たい物はハジメが持ち、ネネには緊急時の携帯食に衣服など、もし逸れてしまった場合でもハジメ達が見つけるまでの、最低限必要なものを持たせることにした。

ハジメ達も逸れるつもりは無いが、万が一のことを考えてネネの旅の装備を整えた。

「これで一通り揃ったかな？」

「そうね。後は……はい」

そう言つてフランが取り出したのは小さな革製の袋だった。

「これにはお金が少し入っているからね。無くさない様にね」

「おかね……」

「そう。これから王都に向かうから、それで何かお買い物しましょう？ 旅でお金は大切なものだから、お金を持ち歩くのに慣れておかないとね」

「……うん」

ネネは真剣な顔で頷いた。お金を持つことなど殆ど初めてだろう。お金になれることも勿論そうだが、何かがあつたときお金がなければ対処できないこともある。一人で宿をとるにしてもお金が無いと

泊まらない。食事にしてもそうだ。

「お金の価値は道すがら教えてあげるからね」
「うん！」

そうして三人はメインコル又王都へ向けて出発した。

王都までの道程はゆっくり進んで三日。ハジメ達は途中、街道に現れた魔獣を殺したりしたが、特に問題なく行程は進んでいた。

三日目の朝。

ネネが魔力の暴走を起こし、意識を失った。

第15話<ユメ、カタナ、ハジメ>（後書き）

ありがとうございます。

ハジメが死んだ状況はこれから何度か出てきます。たぶん特に複線とかではないです。たぶん

次回は土曜の朝とかですかね？ 予定ですが……

一緒にこれまでの話の誤字やらを修正していきます。

章を書き上げた後に定期で上げられれば良いのですが、書けばどんどん直したくなるので……話が進まないんですよ；四章まではなんとなく考えてますので、とりあえず先を考えながら書いては上げ続けていきます。

基本的にはのぼの目指していきますが、何とか（自分含めて）読む方の気持ち盛り上がって頂ける様にがんばりたいと思います。

各章が閑話を除き二十一話前後の予定です。

閑話含めて100000字位を目標にしております。

各話3800～4800位で閑話は3000以下程度にまとめていきます。

投稿形式上、各章終了後に話の内容を変えないよう、文体等の微修正をすることもあるかもしれませんが……出来ればなくて済む様に書いていきますが。

という事で一章はあと五、六話になります。

と宣言して自分を追い込んでみる。……この宣言文が消えないうち
は大丈夫なはずです。

あ、のんびり更新です。（宣言エ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0626z/>

一つの異世界

2012年1月5日19時05分発行